

オリンピック文化プログラムに関する研究 および「地域版アーツカウンシル」の提言

Cultural Programs Held in Conjunction with the Olympic Games and a Proposal for Regional Arts Councils

本論文は、オリンピックの文化プログラムに関して、過去の大会に見られないほど、大規模かつ多様に実施された2012年のロンドン大会に焦点を当てた事例研究を行っている。最初に、「文化プログラム」の歴史の変遷を振り返り、現在までを5つの時期に分類した。

そして、2003年以降、IOCが重視している「レガシー」という概念を把握したうえで、ロンドン大会における文化プログラムのレガシーについての記述を整理した。

続いて、ロンドン大会における文化プログラムの全体概要をイメージ図で提示したうえで、主要なプログラムについて説明を加え、さらに参加者数や事業費等を分析した。そして、文化プログラムの主要なステークホルダーについて検討したうえで、ステークホルダー全体の関係を概念図として提示した。

次いで、ロンドンではなく、地方都市における文化プログラムとして、リーズ市（「リーズ・キャンヴァス」）とリバプール市の事例研究を行った。そして、ロンドン大会における文化プログラムのレガシーについて総括した。

ここまでの研究成果を踏まえ、2020年の東京オリンピックにおける文化プログラムを日本全国で展開していくために、「地域版アーツカウンシル」の必要性について提言を行った。そして、オリンピックの文化プログラムにおいては、さまざまな社会実験を展開することを通じて、「文化に携わることがひとつの職業になり得るのだ」という大きなメッセージを発信していくことが重要であると指摘した。



This case study focuses on the London 2012 Olympic Games and their cultural programs, which had larger scale and greater variety than the cultural programs seen in any previous Olympic Games up to that point. I first review the history of Olympic cultural programs and divide the past into five periods. After reviewing the concept of legacy, which has been emphasized by the International Olympic Committee since 2003, I summarize the descriptions of the legacy of the cultural programs held in conjunction with the London Olympic Games. Using a diagram to illustrate and overview these London Olympic cultural programs, I then explain the major programs and analyze data such as the number of participants and project costs. I also examine major stakeholders in the cultural programs and show the overall relationships among the stakeholders using a schematic diagram. Instead of London, I then pay attention to regional cities and conduct a case study of cultural programs held in Leeds (Leeds Canvas) and Liverpool and review the legacy of the cultural programs held in conjunction with the London Olympic Games. Lastly, on the basis of the above investigations, I propose that regional arts councils are necessary if cultural programs are to be held across Japan in conjunction with the 2020 Tokyo Olympic Games. Also, with regard to Olympic cultural programs, I note the importance of conducting a variety of pilot experiments and disseminating the message that engaging in culture can be a professional pursuit.

1 | はじめに：五輪大会と文化プログラム

2020年、東京で五輪大会が開催される。

五輪大会に関して意外と知られていないことであるが、大会の開催にあたっては、オリンピズム（オリンピック精神）の普及を目指す観点から、スポーツ競技と同時に文化芸術の振興も重要なテーマとなっている。これは「文化プログラム；Cultural Programme」と呼ばれるものである。

IOC¹の「オリンピック憲章」では、前文に続いて「オリンピズムの根本原則」が記載されているが、そこでオリンピズムとは「スポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである」（IOC 2013：10）と定義されている。すなわち、そもそもオリンピックとはスポーツだけではなく、文化・教育と一体となった活動であったのである。

上述した「オリンピック憲章」において、「第5章 オリンピック競技大会」の「39 文化プログラム」にて、「OCOG²は少なくともオリンピック村の開村から閉村までの期間、文化イベントのプログラムを催すものとする。当該プログラムは、IOC理事会に提出し、事前に承認を得なければならない」（IOC 2013：67）と記述されている。

こうした背景のもと、特に近年になって「文化プログラム」はIOCから重視されるようになってきている。

ちなみに、五輪大会を誘致したいと考える「立候補都市」は、詳細な開催計画を説明した「立候補ファイル」をIOCに提出し、それを受けてIOCの評価委員会による現地評価調査を受ける必要がある。この「立候補ファイル」とは、IOCから提示される質問項目に基づき、「立候補都市」が策定するオリンピック開催のための全体計画であり、競技種目や競技会場のほか、開催による影響とレガシー、大会コンセプトと長期戦略との整合性等500以上の質問項目に回答する形式の書類である。

そして、この「立候補ファイル」における「文化プログラム」の位置づけは、2012年版では“Theme1”であったのに対して、2016年版からは“Theme2”に繰り上

がり、大会全体のコンセプトに関連させて記述することが求められている。この変更は、オリンピック全体における「文化プログラム」の重要性が高まったものと理解することができる。

そして、大会開催年を含む4年間にわたって「文化プログラム」を展開することが開催都市には求められている。換言すると、夏季のオリンピック大会というスポーツ・イベントは4年に1回しか開催されないが、オリンピックの「文化プログラム」は世界のどこかの都市で切れ目なく、開催され続けているのである。

もっとも、この「文化プログラム」とは、単なるイベントのことだけを意味するのではない。実際に直近の五輪であったロンドン大会において、後述する通り、社会全般にインパクトのある、多様な文化プログラムが実施された。

そして、文化プログラムは五輪大会の開催都市（2020年の場合は東京）で実施されるだけでなく、全国で実施されることが想定されているのである。

2 | 「文化プログラム」の歴史的変遷

2012ロンドンの「文化プログラム」について述べる前に、過去の五輪大会における“文化的要素”の位置づけについて触れておきたい。

フランスのクーベルタン（Coubertin）男爵の提唱により、第1回の近代オリンピックが1896年にギリシャ・アテネで開催されることになって以降、オリンピックにおける文化的要素の変遷は、図表1の通り、おおむね5つの時期に分類することができる。

①「万国博覧会」の時代

1896年の第1回アテネ（ギリシャ）から1908年の第4回ロンドン（イギリス）までの時期は、オリンピックに文化的要素がない時代であった。

もっとも、この時期のオリンピックは、実は国際博覧会にあわせて開催されるスポーツ・イベントという性質であった。第2回のパリ、第3回のセントルイス、第4回のロンドンについては、「同年に同都市で開催された博覧

会の『添え物』に過ぎなかった」(関口2009:1)と評価されている。特に第3回のセントルイスの五輪大会については、「当初、シカゴに決まっていた開催を万国博覧会にあわせてセントルイスへ半ば強引に変更された」(道重2009:108)のものであった。そもそもクーベルタン男爵は「一九世紀のパリ万博から強い影響を受けて、オリンピック開会式や授賞式等のセレモニーを取り入れた」(関口2009:1)とされる。その意味では、この時期の五輪大会は、「万国博覧会の時代」と言うこともできよう。

②「芸術競技」の時代

続く1912年の第5回ストックホルム(スウェーデン)から1948年の第14回ロンドン(イギリス)までの時期は、近代オリンピックの提唱者であるクーベルタン男爵の強い要望もあり、建築、彫刻、絵画、文学、音楽の5部門がオリンピック競技のひとつである「芸術競技」とし

て実施されていた。具体的には、この5部門において、参加アーティストがスポーツを題材にした芸術作品を制作し、採点により順位を競うというものであった。しかし、一般のスポーツ競技においては、得点やタイム、距離等の達成値といった客観的な指標によって順位をつけることが可能であるのに対して、芸術作品について客観的な基準をもって採点を行うことは困難である。こうした理由から、この「芸術競技」は廃止された(パリー and ギルギノフ2008:282-295)。

③「芸術展示」の時代

そして、1952年の第15回ヘルシンキ(フィンランド)から1988年の第24回ソウル(韓国)までの時期においては、オリンピックの公式なプログラムとして「芸術展示」が行われた。

ここで日本人にとっても馴染みの深い1964年の東京

図表1 近代オリンピックにおける文化的要素の変遷

年代	大会	文化プログラムの概要
①1896年～1908年	第1回アテネ(ギリシャ)～第4回ロンドン(イギリス)	「万国博覧会」の時代
②1912年～1948年	第5回ストックホルム(スウェーデン)～第14回ロンドン(イギリス)	「芸術競技」の時代
③1952年～1988年	第15回ヘルシンキ(フィンランド)～第24回ソウル(韓国)	「芸術展示」の時代
④1992年～2008年	第25回バルセロナ(スペイン)～第29回北京(中国)	「文化プログラム(文化イベント)」の時代
⑤2012年～	第30回ロンドン(イギリス)～	「新しい文化プログラム」の時代

資料：太下(2012)をもとに筆者作成

図表2 1964年の東京オリンピックにおける芸術展示

部門	内容	会場	会期	備考
美術部門	古美術(絵画、彫刻、工芸、建築、書道)	東京国立博物館	10/1～11/10	古代から江戸時代までの800点以上
	近代美術(絵画、彫刻、工芸)	国立近代美術館(竹橋)	10/1～11/8	明治20年以降の近代美術約200点
	写真	銀座松屋8階催事場	10/9～10/21	日本の作家56名のカラー作品150点
	スポーツ郵便切手	通信総合博物館(大手町)	10/1～10/21	スポーツをテーマとした記念切手20種
芸能部門	歌舞伎	歌舞伎座	10/2～10/27	ナイトカブキ(深夜興行)も上演
	人形浄瑠璃	芸術座(有楽町)	10/3～10/12	第3部は外国人向けに分かりやすい演目
	雅楽	宮内庁楽部舞台	10/21, 22	管絃2曲、舞楽4曲
		水道橋能楽堂	10/5～10/9	観世、宝生、金剛、金春、喜多の5流が合同公演
	能楽	観世会館(大曲)	10/12～10/16	
		古典舞踊・邦楽	新橋演舞場	10/16～10/20
民俗芸能	東京文化会館(上野)	10/17, 18	北海道から沖縄までの17演目、300名以上が出演	
その他	現代美術	-	-	美術10団体(日展等)の展覧会を、芸術展示に準ずる協賛展として展示

資料：電通 and 東京オリッピクス作成委員会(1966)をもとに筆者作成

大会における芸術展示の事例を紹介しておく、1964年には、「美術部門」で古美術等4種目、「芸術部門」(パフォーマンス・アーツの部門)で歌舞伎等6種目、計2部門10種目の芸術展示が開催された(図表2)。

④「文化プログラム(文化イベント)」の時代

その後、1992年の第25回バルセロナ(スペイン)から第29回北京(中国)までは、多彩な行事が行われる「文化プログラム(文化イベント)」の時代になっていく。たとえば、バルセロナ大会においては、図表3の通り、1988年から1992年までの間にさまざまな「文化プログラム」が実施されており、オリンピック開催後のバルセロナの都市ブランドの形成に大きなインパクトをもたらした。

このようにバルセロナ大会において、「文化プログラム」の位置づけが大きく変化した背景としては、冷戦終了後にグローバル化が加速する世界情勢の中で、多文化理解の観点から「文化」の重要性がより高まっていった点を指摘することができる。

また、2004年の第28回アテネ大会(ギリシャ)の際には、2001年から4年間にわたって文化プログラム「カルチュラル・オリンピアド(文化オリンピック)」が実施された。この文化プログラムにおいて、音楽、演劇、ダンス、パフォーマンス、オペラコンサート等の舞台芸術から、展示、映画、文学ほかさまざまな文化イベントが開催され、スポーツ・イベントと並ぶもうひとつのオリンピックを実現させた、とのことである。さらに、この「カ

ルチュラル・オリンピアド(文化オリンピック)」の企画・運営を目的として、2000年にアーツカウンシル「ギリシャ文化機構(Hellenic Culture Organization)」が創設されている。そして、2004年のカルチュラル・オリンピアド終了後、ギリシャ文化機構は事業内容を再編成し、ギリシャの現代文化・芸術の国際的振興へと役割をシフトし、さまざまなフィールドへその活動を展開している、とのことである³。

⑤「新しい文化プログラム」の時代

そして、前述した通り、2012年のロンドン大会において、文化プログラムの位置づけが極めて重要なものへと変化した。

3 | オリンピックの「レガシー」とは何か

①2012年ロンドン大会の3つの特徴

2012年のロンドン大会は、過去の五輪大会と比較して3つの点で大きな特徴があったと考えられる。

ひとつは、第二次世界大戦後に同じ都市で2度目の五輪大会が開催されるのは、ロンドンが最初であったということである⁴。実はロンドンは第二次世界大戦前の1908年(第4回)にも五輪大会を開催しており、大戦直後の1948年(第14回)に続いて、2012年は通算3度目、第二次世界大戦後で2度目の開催であった。

2つ目は、後述するように「レガシー」という概念が重視された最初の大会であった、という点である。

3点目は、この「レガシー」を実現するために、「文化プ

図表3 第25回バルセロナ大会における文化プログラム

実施年	プログラム名	概要
1988~1989年	Barcelona, the City and 92	直接的・間接的にオリンピックに関連した、進行中の都市計画プロジェクトについての展覧会。35万人が来場する。
1990年	Casa Barcelona	バルセロナと結び付いたデザインによる日用品の創作を支援するためのプロジェクト。世界的に有名な建築家ミース・ファン・デル・ローエが「バルセロナ・チェア」を制作した1929年のバルセロナ万博にちなむ。
1992年	The Olympic Festival of the Arts	4年間のクライマックスとしてのイベント。演劇、ダンス、音楽、オペラ、パラエティやストリートショーなど、約200のショーと500以上のパフォーマンスが行われ、45万人以上が参加。特にカタロニアの脚本家やカンパニーなどの作品に焦点を当てる。

資料：太下義之「創造都市バルセロナの文化政策」(太下2008：41)

プログラム]が過去の大会に見られないほど、大規模かつ多様に実施されたという点である。

さて、上述したオリンピックの「レガシー」という概念であるが、これはいったいどのような内容なのであろうか。IOCのパンフレット“OLYMPIC LEGACY 2013”によると、「レガシー」とは「スポーツだけではなく、社会、経済、環境の各面に関して、オリンピック開催都市に残され得る一連の利益であり、開会式前に経験されるものもあれば、大会終了後、数年を経過しても目に見えない可能性もある」(IOC 2013 : 8)と説明されている。なお、同資料において、「文化と教育は五輪大会にとって今までずっと不可欠な要素であった」(IOC 2013 : 24)とも記述されている。

ではIOCはいつから、この「レガシー」という概念を使い始めたのであろうか。もちろん、一般名詞としての「レガシー」はIOCにおいても従前から使用されてきたであろう。ただし、今日のような概念としての「レガシー」が最初に提唱されたのは、2002年11月にローザンヌでIOCオリンピック研究センターとバルセロナ自治大学オリンピック・スポーツ研究センターの共催で開催された“The Legacy of the Olympic Games 1894-2000”というシンポジウムであったと推測される。IOCが編集したオリンピックの「レガシーとインパクト」に関する文献資料集“Olympic Games: Legacies and Impacts”を見ると、「レガシー」という概念が初出する文献が上記シンポジウムの論文であることが確認できる(IOC 2014 : 6-9)。そして、同シンポジウムにおいては、オリンピックの「レガシー」に関して、次の8つのテーマが設定された。すなわち、①オリンピックの「レガシー」およびその歴史展開の理解、②都市および環境、③スポーツ、④経済と観光、⑤政治、⑥文化、社会および交流、⑦教育とドキュメンテーション、⑧未来のオリンピックの「レガシー」の構想、の8項目である⁵。

同シンポジウム開催の翌年、「オリンピック憲章」2003年版において、IOCの役割は「オリンピック競技大会の規模や経費を適切に抑えることを含め、オリン

ピック競技大会の将来性のある遺産を残すことを、開催都市や開催国に対して奨励する手段を講じる」(JOC 2003 : 12)となり、「遺産(レガシー)」という概念が初めて明記されたのである。

2003年以降、2004年にアテネ、2008年に北京で五輪大会が開催されているが、大会の開催都市は7年前に決定されるので、どちらの都市もオリンピック憲章に「レガシー」という概念が追記される以前にIOCに対して立候補ファイルを提出していたことになる。つまり、「レガシー」という概念がオリンピック憲章に追記されてから初めて、五輪大会の開催都市として選定されたのがロンドンであったのである。

なお、この「レガシー」という概念が提唱された背景として、2001年7月にIOCの第8代会長としてジャック・ロゲが就任した点を指摘することができる⁶。ジャック・ロゲは「第五代ブランテージ会長以来、二人目のオリンピック出場経験を持つIOC会長」(猪谷2013 : 203)であり、「(中略)その経歴もあって、彼は常にオリンピックのあるべき姿を追い求めてきた」(ibid.)とのことである。そして、より適切な規模の五輪大会の開催等、オリンピックの改革に着手した一環として、オリンピックの「レガシー」という概念が提唱されたのである。

②ロンドン大会における「レガシー」と文化

ロンドン大会に関しては、少なくとも4回にわたって、レガシーに関する文書が策定・公表されている。

最初は2005年2月、ロンドンオリンピック・パラリンピック組織委員会(The London Organising Committee of the Olympic and Paralympic Games ; 以下、LOCOG)による「2012年ロンドン・オリンピック招致立候補ファイル」である。同資料の中で、文化に関連するレガシーとしては、「コミュニティにとってのレガシー」の項目で、「イースト・ロンドンの豊富な遺産をもとにして、五輪大会は文化的活動も強化し豊かにするとともに、創造産業のための新しい機会と設備を提供する」(LOCOG 2005 : 23)と記述されている。

次は2007年6月、英国の文化・メディア・スポーツ

図表4 ロンドン大会における文化に関するレガシーの記述

年月	文書名／機関名	文化関連するレガシー
2005年2月	2012年ロンドン・オリンピック招致立候補ファイル／LOCOG	コミュニティにとってのレガシー
2007年6月	2012年大会へ向けた公約／DCMS	若い世代の人たちが、地域のボランティア活動、文化活動、スポーツに参加するよう鼓舞する
2008年6月	大会前・大会期間中・大会後 2012年ロンドン大会を最大限活用する／DCMS	若い世代の人たちを鼓舞する（新たな文化活動：2012年大会によって、新たに数万人の若い世代の人たちが文化活動に参加する）
2010年12月	2012年オリンピック・パラリンピック大会のレガシーに関する計画／DCMS	大会を通じてコミュニティ参加を促進

資料：各種資料をもとに筆者作成

省 (Department for Culture, Media and Sport: 以下、DCMS) による「2012年大会へ向けた公約」である。この中で、5つの公約のうち、3番目に「若い世代の人たちが、地域のボランティア活動、文化活動、スポーツに参加するよう鼓舞する」(DCMS 2007: 3) と掲げられている。

そして、2008年6月に、やはりDCMSが「大会前・大会期間中・大会後 2012年ロンドン大会を最大限活用する」という文書において、「若い世代の人たちを鼓舞する」という項目の中で「新たな文化活動：2012年大会によって、新たに数万人の若い世代の人たちが文化活動に参加する」(DCMS 2008: 6) と記述している。

さらに、2010年12月に、やはりDCMSが「2012年オリンピック・パラリンピック大会のレガシーに関する計画」の中の「大会を通じてコミュニティ参加を促進」という項目で、「300万人以上の人々がロンドン2012フェスティバルの一部に参加することが目標」(DCMS 2010: 10) と記述している。

そして、これらの文化関連のレガシーを実現するための主要な事業として、「文化プログラム」が位置づけられているのである。

4 | 2012ロンドン五輪大会における「文化プログラム」の概要

①立候補段階における構想

2012年の開催都市となったロンドンであるが、同大会の選考過程においては、立候補都市としてライバルであったパリの方が優勢であると見られていた。では、どう

してロンドンが勝利したのかと言えば、それは「文化プログラム」の提案が良かったからだとされる⁷。

こうしたことから、2012年ロンドン大会以降にオリンピックを招致する都市は、オリンピックならびに開催都市における文化の役割について、創意工夫のあるプログラムを提案していかなければならないとされている。

ロンドン大会の「立候補ファイル」作成時における文化教育分野の最高責任者で、後にサウスバンクセンター（ロンドン）の芸術監督となるジュード・ケリー (Jude Kelly) 氏は、オリンピックの「文化プログラム」について次のように語っている。

「正直に言いますけれど、(オリンピック立候補ファイル全般の提案内容については) パリの方がロンドンよりも中身は良かったのです。でもどうしてロンドンが勝ったのか、と言いますと、ロンドンの方が熱のこもった夢を提案したからです。(中略) 多くの若者の人生をより良いものに変えて、そして世界とつながるためにオリンピックを開催したいのだ、と」

「ロンドンのオリンピック招致では、“Sports” という言葉を使わずに、“Culture” という言葉で活動を展開したのです。(中略) 若者の特権というものは、スポーツだけにあるのではなく、むしろイマジネーションにこそあるのです」

「IOCは、オリンピックを招致しようとしている都市が、オリンピックによって文化面で何を達成したいのか、そして、それがいかに文化政策につながって、持続

可能なものとなっていくのか、という点に関して、提案をぜひ聞きたいと思っているのです」

「ロンドン以降、オリンピックを招致する都市は、文化の役割について提案していかなければならないと思います」「もしも(オリンピック招致の勝負に)勝てなかったとしても、招致の過程で行う(文化関係者との)対話はとても貴重で価値のあるものとなるでしょう」⁸

つまり、ケリーの発言をもとに考えると、IOCはオリンピックを単にスポーツや身体の運動能力をテーマとした祭典としてではなく、文化や精神の創造性をキーワードとしてイベントに重点を移動させることにより、すでに複数回の開催実績のある先進国においても持続可能なオリンピックというビジョンにつなげていこうとしているものと推測される。

②ロンドン大会における文化プログラムの全体概要

こうした背景のもと、ロンドン大会の文化プログラムに関しては、以下の5つの目標が設定された(ACE 2013a:7)。

- 1. 地球上で最も素晴らしいショー(オリンピック/パラリンピック)において、文化が重要な役割を果たすこと
- 2. 一生忘れられないような体験を(参加者に)提供

- すること
- 3. 英国の類まれなる文化とクリエイティブ産業を、新たな観客に対して紹介すること
- 4. 英国の文化を世界中に発信すること
- 5. ロンドン2012フェスティバルに参加する機会を、すべての人々に提供すること

ではロンドン大会においては、これらの目標を達成するために、具体的にどのような「文化プログラム」が実施されたのであろうか。横軸に時間(2008年から2012年)を設定し、縦軸に文化プログラムが「従来型」であったか、または「新機軸(新規性・独自性)」であったか、という区分でマトリックスに整理すると、ロンドン大会の文化プログラムの全体概要は図表5のようになる。

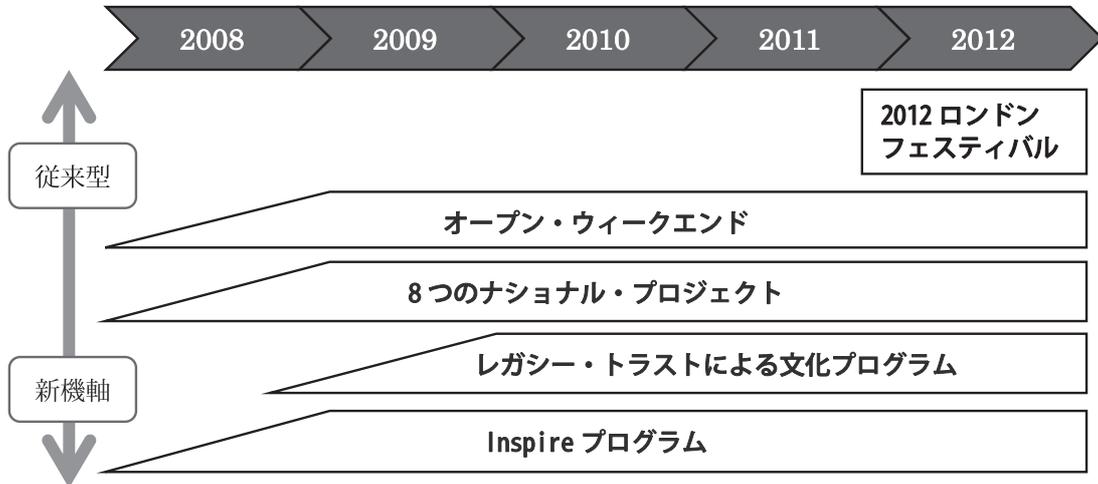
ロンドン大会の文化プログラムのうち「従来型」と位置づけられるプロジェクトから先に紹介したい。

「オープン・ウィークエンド」は、2012年の五輪大会の開会式へ向けてのカウントダウンを祝福するために、2008年から毎年夏期に3日間だけ実施された年中行事である⁹。

③8つのナショナル・プロジェクト

また、2008年から開始された「8つのナショナル・プロジェクト」は、Garcia 2013においてあげられてい

図表5 ロンドン大会の文化プログラムの全体概要



資料：各種資料をもとに筆者作成

図表6 8つのナショナル・プロジェクトの概要

名称	概要
Stories of the World	英国内の59の博物館、図書館、文書館が2011年から2012年にかけて35件以上の展示を行うもので、英国図書館の展示“ <i>In Your Own Words</i> ”は、国内の若者が英国図書館の所蔵資料から選んだ資料を図書館やオンラインで展示 ¹⁰ 。長期の教育プログラムを含んでおり、たとえば、ミュージアムと若者たちを結びつけるため、(美術館に縁遠い)若者たちによるキュレーションの展覧会も開催した。現在もこうした試みを継承している美術館がある ¹¹ 。
Somewhereto_	素晴らしいクリエイティブなアイデアを持つ若者がそれを実現するために必要なスペースを見つける仕組み。自分のニーズに合ったスペースを探し出すことができるだけでなく、そのスペースは無料で利用できる ¹² 。
Film Nation	Panasonicとクリエイティブ・イングランド ¹³ による14歳から25歳の若者を対象にしたショート・フィルムのコンテスト。2010年から3年間にわたりエントリーのあった439作のショート・フィルムの中から10部門において優秀作品を選び、賞を授与した。受賞作品は、五輪会場で上映されるという栄誉を得た ¹⁴ 。
Discovering Places	英国中の隠れた名所や誰かに伝えたい話にまつわる場所などを英国国民に紹介し、英国の素晴らしさを発見・探究し、そこから何かを感じてもらおうというプロジェクト。250,000人を超える人々が参加した ¹⁵ 。
Artists Taking the Lead	英国のアーティストカウンシル主催のプロジェクト。アーティストやプロデューサーによって構成される独立委員会の選考により、パブリックアート等、合計12件の文化プログラムが選定され、委嘱制作された ¹⁶ 。詳細は次章参照。
Unlimited	身体障害者による芸術表現の可能性を開拓し、より高い水準に向上させることを目的としている。パラリンピックのオープニング・セレモニーと、その他26作品を委嘱した。ShapeとArts Adminという2つのNPOによって、現在もプログラムは継続されている ¹⁷ 。
World Shakespeare Festival	シェイクスピアを国際的にアピールし、英国と世界の劇団との交流やコラボレーションを促進した。この中にはシェイクスピアの37の戯曲を35カ国の劇団が37の言語で演じるGlobe to Globeプロジェクトも含まれていた (Garcia2013:12)。
Sounds	下記の一連の重要な国際的音楽プロジェクトの総称。BBC Proms、BBC Hackney Weekend、BT River of Music、Youth Music Voices、Music 20x12、Music Nation (Garcia2013:12)

資料：各種資料をもとに筆者作成¹⁸

る8つのプロジェクトのことであり、その概要は、図表6の通りである。

④レガシー・トラストによる文化プログラム

レガシー・トラスト(後述)による文化プログラムは2009年に開始され、3つの主要なカテゴリーがあった。

このうち、“Community Celebrations”は、スコットランドで実施された“Speed of Light”等、英国の4つの地域で実施された大規模な参加型プロジェクトで構成されていた。

二つ目は全国規模のプログラムであり、5～11歳の子どもたち数千人がデジタル映画を制作する“Tate Movie”と前述した“somewhereto_”という2つの大きなプロジェクトが実施された。

三点目は英国の各地域で実施されたプログラムであり、その代表的なものとしてBig Danceがあげられる。このBig Danceは、2年に一度行われるダンスの祭典

であり、レガシー・トラストの支援により、Foundation for Community Danceとロンドン市長が主催した。特に2012年のイベントは英国で史上最も規模の大きいダンスの祭典となった。そして、ショッピングセンターや公園など様々な会場で3,500を超えるイベントが行われ、ありとあらゆる形式のダンスが披露された¹⁹。

⑤Inspireプログラム

Inspireプログラムとは、2012年のロンドン大会に端を発する優れた非営利プロジェクトやイベントを、The Cultural Olympiad Board(後述)およびIOCが公式に承認するプログラムのことである²⁰。

Inspireプログラムは、(非営利)産業、教育、スポーツ、持続可能性、ボランティア、そして文化という6つの分野における非営利のプロジェクトが対象となっている。そして、最終的に2,713件のプロジェクトが実施され、1,000万人以上が参加した。このうち、文化は717件

のプロジェクトが実施された (LOCOG 2012 : 6-8)。

このInspireおよびロンドン2012フェスティバルのロゴは、「ロンドン・オリンピック/パラリンピックのロゴから五輪マークを外したものを採用したため、過去の大会よりも多岐にわたる文化組織の参加促進や認知向上につながった」(ACE and LOCOG 2013 : 29) とのことである (図表7)。

そして、「文化プログラムに関する独自のロゴが、五輪大会のメインのロゴとは別に導入・実施されたのは、2012年のロンドン大会が初めてのことである。この

文化プログラムのロゴ (Inspireおよびロンドン2012フェスティバルのロゴ) は、大会のメインのロゴから五輪のマークを消去したものであった。五輪のマークは使用しないが、一つのロゴであるという戦略は、オフィシャルパートナーの利害と対立することなく、様々な組織がロンドン・オリンピック/パラリンピックとの関連性を表明することができた」と評価されている (Garcia 2013 : 168-170)。

Inspireプログラムの実施によって、参加者の55%が文化的な活動を初めて体験・関与した。また、プロジェ

図表7 Inspireおよびロンドン2012フェスティバルのロゴ



資料 : Garcia (2013 : 168) より²¹

図表8 ロンドン2012フェスティバルにおける8つの主要プロジェクトの概要

名称	概要
BT River of Music	テムズ川沿いの6会場で開催される5大陸の野外音楽フェスティバル ²² 。
Globe to Globe	シェイクスピアの37の戯曲を35か国の劇団が37の言語で演じるプロジェクト (再掲)。日本からは蜷川幸雄の演出した「シンベリン」が招聘された。
How Like an Angel	UK在住のボーカルアンサンブル Fagioliniの神聖な歌のライブにより伴奏される、オーストラリアのサーカス Circaの6人の軽業師のパフォーマンス。ロンドン歴史的な教会の建物の中で実演された ²³ 。
Mittwoch aus Licht	文化プログラム開始の前年に亡くなったドイツの作曲家シュトックハウゼン (1928-2007) の最後のオペラ作品「Mittwoch aus Licht」に触発された3日間の音楽祭。バーミンガムで開催 ²⁴ 。
The Big Concert	2012年6月21日にロンドン・フェスティバルのオープニング・イベントとして開催。このビッグコンサートは、世界で最高の指揮者のひとりであるグスタボ・ドゥダメルおよびベネズエラのシモン・ボリバル交響楽団によって演奏される、ドラマチックなスターリング城を背景にした真夏の夜の野外コンサート ²⁵ 。
Campagne Carabosse (The Fire Garden)	ロンドン大会を特色付けるために、世界遺産のストーンヘンジにおいて、500以上の発煙筒と40のたいまつとカンテラに点火をしたイベントを開催。この「火の庭」は、フランスのアートグループ Compagnie Carabosseによって演出され、3日連続で夜間に開催 ²⁶ 。
Mandara	MANDALA (『円』という意味のサンスクリット語) は、伝統的なアジアの音楽とダンスを、英国のアジア人による都市的な文化と融合させ、それに市庁舎等を対象とした劇的な3Dデジタル映像のプロジェクションを加味した、アウトドアでの無料のマルチメディア・スペクタクル ²⁷ 。
Piccadilly Circus Circus	ピカデリー・サーカスでサーカスを行うというイベント。17か国から、240人を超えるサーカス・アーティスト (空中曲芸師、ワイヤブランコの曲芸師、フラフープの芸人、ジャグラー、竹馬の軽業師、BMXのストリート・ダンサー、綱渡り芸人、中国の棒術師、コンテンポラリーな道化、ミュージシャン、およびボイス・パーカッション (beatboxer) を含む) が出演 ²⁸ 。なお、このプロジェクトは、会場が混雑しすぎるという懸念があったため、事前に開催情報が告知されなかった、とのことである ²⁹ 。

資料 : 各種資料をもとに筆者作成

クトの84%は、Inspireマークを使用できたことにより目立ち、広く紹介された、と回答している。そして、プロジェクトの78%は、ロンドン大会後も継続されている(LOCOG 2012: 6-7)。

⑥London 2012 Festival

ロンドン大会のフィナーレを飾った「ロンドン2012

フェスティバル」は、夏至の日の2012年6月21日から9月9日まで12週間にわたって、英国各地で開催された祭典であり、「英国史上最大規模の祭典」となった(ACE and LOCOG 2013: 5)。

同フェスティバルは、文化プログラムの芸術監督ルー・マッケンジーが全体をプロデュースし、図表8の8

図表9 London 2012 Festivalと文化プログラム全体の比較

項目	London 2012 Festival	文化プログラム全体 ³¹
活動数	33,631件 (18.9%)	177,717件 ³²
参加者	2,020万人 (46.5%)	4,340万人
アーティスト数	25,000人 (61.8%)	40,464人
うち 新進アーティスト	1,299人 (21.1%)	6,160人
新たな委嘱作品	2,127件 (40.0%)	5,370件
事業費	6,300万£ (49.8%) ³³	1億2,662万£

資料：Garcia2013およびACE (2013a)をもとに筆者作成³⁴

図表10 オリンピック文化プログラムへの関与者数

	ロンドン2012フェスティバル	フェスティバル以外	合計
有料入場・来場者数(延べ)	4,765,931	160,031	4,925,962
無料入場・来場者数(延べ)	11,303,193	21,211,396	32,514,589
無料参加者数(提供側)	4,123,953	1,801,961	5,925,914
ボランティア	12,208	33,389	45,597
合計	20,205,285	23,206,777	43,412,062

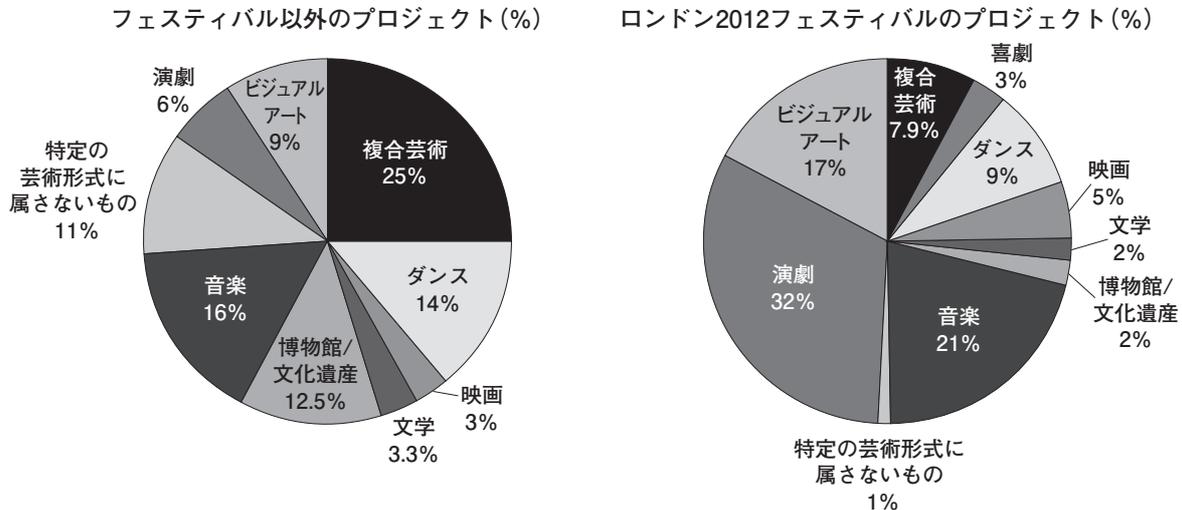
資料：Garcia2013をもとに筆者作成

図表11 地域別の参加者数

	有料入場・来場者数(延べ)	無料入場・来場者数(延べ)	無料参加者数(提供側)	ボランティア	合計
East Midlands	7,775	3,344,863	107,860	4,249	3,464,747
East of England	58,522	913,661	23,934	779	996,896
London	3,944,823	13,364,245	297,349	6,966	17,613,383
North East	15,753	1,507,048	33,556	1,890	1,558,247
Yorkshir	21,453	2,836,033	37,835	753	2,896,074
North West	17,978	2,364,014	37,808	856	2,420,656
South East	234,660	948,646	515,707	1,513	1,700,526
South West	91,624	618,712	211,748	6,427	928,511
West Midlands	314,109	1,026,778	525,657	14,911	1,881,455
Wales	26,357	297,373	54,760	1,533	380,023
Northern Ireland	4,972	186,066	11,218	1,140	203,396
Scotland	32,558	840,703	43,396	927	917,584
Multi-region	105,133	622,022	18,727	933	746,815
UK-wide	50,245	3,644,425	4,006,359	2,720	7,703,749
合計	4,925,962	32,514,589	5,925,914	45,597	43,412,062
				ロンドン以外の地域の参加者数	25,798,679

資料：Garcia2013をもとに筆者作成

図表12 文化プログラムの芸術形式³⁵



資料：Garcia2013をもとに筆者作成

つの主要プロジェクトを含んでいた。

⑦London 2012 Festivalおよびその他の文化プログラムのデータ分析

前述したLondon 2012 Festivalとその他の文化プログラムをデータで比較してみたものが、図表9である。

ロンドン大会の文化プログラムは、総事業費が1億2,662万£ (1 £ = 175円で計算すると約222億円)³⁰という巨額なプロジェクトであり、総参加者数も4,340万人と極めて大きな規模であった。

そして、London 2012 Festivalの期間はわずか12週間であったが、総事業費の約半分、文化プログラム全体に参加したアーティストの6割強、参加者の半数弱、新たな委嘱作品の4割が集中していたことが理解できる。一方で、活動数は全体の2割弱であったことから、London 2012 Festivalにおいては比較的に規模の大きな活動が展開されていたと推測できる。

また、作品を披露する側の参加者が590万人以上もいたという事実は特筆すべき点であろう。これらの参加者の中には、Work no.1197 (オリンピック初日に実施された。3分間にわたり、英国中の鐘やベルをできるだけ速く、大きな音で鳴らすというイベント)の約290万人も含まれている。

その他として、ロンドン市内の参加者数は、合計

1,761万人であったのに対して、ロンドン市以外の地域での参加者数は、合計で2,580万人弱にも達している。

文化プログラムで実施された芸術形式に関して、図表12の通り、さまざまな分野のプログラムが実施された。ロンドン2012フェスティバルでは、演劇、音楽、ビジュアルアート等が比較的多く実施され、それ以外においては、複合芸術、音楽、ダンス等が比較的多く実施された。

⑧文化プログラムのステークホルダー（組織体制）

ロンドン大会の文化プログラムには、さまざまなステークホルダーが関与していた。最初に文化プログラムの収支の面から、ステークホルダーを概観したい。

4年にわたる文化プログラムの総予算1億2,660万ポンド (約222億円) は、さまざまな組織から出資された。主な出資元はLOCOG³⁶、アーツカウンシル・イングランド (以下、ACE)、Legacy Trust UK (後述) で、少々金額は低くなるがGreater London Authority (以下、GLA) が続いている。National Lottery (国営宝くじ) や公共の資金は、ACE、Legacy Trust UK、Olympic Lottery Distributor、等を経由して、文化プログラムに提供された。

■LOCOG

LOCOGは、英国政府のオリンピック開催準備委員会がロンドン大会の開催を勝ち取ったまもなく後の2005

図表13 カルチュラル・オリンピアドの収入（資金提供者別）および支出（目的別）

収入（資金提供者別）		支出（目的別）	
LOCOG	£33,795,041	諸経費・人件費・リソース	£9,439,623
ACE	£36,362,949	マーケティング/コミュニケーション	£4,428,926
Legacy Trust UK	£35,702,327		
GLA	£4,618,000	プログラム	£112,750,989
その他	£16,141,221		
£126,619,538		£126,619,538	

資料：Garcia2013（元資料：LOCOG, Arts Council EnglandおよびLegacy Trust UK）

年7月に設立された。LOCOGは、2012年のロンドン・オリンピックとパラリンピック大会の設営、広報および実施について責任を持つ組織である。LOCOGの会長には元陸上競技選手で政治家のセバスチャン・コー卿が就任し、また、最高経営責任者はやはり政治家で財務省の商務長官を務めた経験のあるポール・デイトンが就任した。取締役会メンバーは、英国政府、ロンドン市長、英国オリンピック協会（BOA）、英国パラリンピック協会（BPA）、国際オリンピック委員会の英国委員といった特別な専門知識を持つメンバーだけでなく、以前オリンピックの選手だったメンバーも含めて構成された³⁷。

文化プログラムに関する組織としては、LOCOGが設立される以前の2004年5月に、前述したジュード・ケリーがオリンピック招致に向けた芸術・文化・教育諮問委員会（Arts, Culture and Education Advisory Committee）の委員長に指名された³⁸。

もともと招致の時点における文化プログラムの基本コンセプトは、ジュード・ケリーが提案したものである。しかしその後、ジュード・ケリーとLOCOGの間で考え方の衝突が発生した。そこで2007年、LOCOGは文化プログラムの責任者としてアーティストのキース・カーンを指名した。

文化プログラムに関する実際のガバナンスは、北京オリンピックが開催された2008年以降に展開することとなった（Garcia2013：137）。しかしその後、キース・カーンとLOCOGの関係も良好ではなくなった³⁹。

そして2010年には、LOCOG、DCMSおよびロンドン市長が、カルチュラル・オリンピアド委員会（The

Cultural Olympiad Board）を新たに創設した。この委員会はトニー・ホール（Tony Hall）⁴⁰が議長を務め、文化プログラムへの主要な資金援助組織等を含む、主な文化機関のリーダーがメンバーとなった（Garcia2013：137）。

カルチュラル・オリンピアド委員会は当初、独立した組織として設立された。しかし、議長のトニー・ホールがLOCOGの文化部門の代表者でもあったことから、2011年にLOCOGの公式な委員会として位置づけられた。このような経緯を経て、文化プログラムはオリンピック/パラリンピックのガバナンス構造の中に組み込まれることになったのである（Garcia2013：137）。

このカルチュラル・オリンピアド委員会において一流の文化人がチームメンバーとして任命され、また、LOCOGの公式な委員会であると認識されたことは、文化プログラムの信頼性を高めることになった、と評価されている（Garcia2013：159）。

そして、2010年に、英国の州立劇場ノッティンガム・プレイハウスの最高責任者等を経験したルース・マッケンジー（Ruth McKenzie）が文化プログラムの芸術監督に就任し、主要なナショナル・プロジェクトの大半を含む200の新たな委嘱プロジェクトや英国または世界の主要な文化組織との共同プロジェクト等を公表した（Garcia2013：13）。

文化プログラムの芸術監督を務めたルース・マッケンジーは、「文化プログラムの総括」の中で、「文化プログラム、特にロンドン2012フェスティバルの成功の中心に、この委員会があったことは間違いない。（中略）今回

の方法はぜひ、今後開催されるオリンピック／パラリンピックにも推奨したい」と高く評価している(ACE and LOCOG 2013: 16)。

なお、LOCOGにおける文化プログラムの担当部署は、段階的に人数が増えていき、2012年時点では約50名の規模となった⁴¹。

ところで、文化プログラムの全体像を前項にて概観したが、不思議なことに、ACEやLOCOG等が発行した報告書等において、ロンドン大会の文化プログラムの全体像を概観した資料は見つけることはできなかった。その理由としては、上述した通り、文化プログラムの責任者がジュード・ケリー（おおむね2004年～2007年）、キース・カーン（おおむね2007年～2010年）、そして最後にルース・マッケンジー（2010年～2012年）というように、次々と交代していったため、文化プログラム全体としての整合性を図ることが実質的に不可能であったためと推測される。

■アーツカウンシル (ACE)

アーツカウンシルは文化プログラムに関連して、主に3つの役割を担っていた。ひとつは文化プログラムへの資金提供者としての役割であり、全事業費のうち約29%を拠出した。2つ目の役割は、主要な文化プログラムの実施を支援するという役割であり、Unlimited等の複数の文化プログラムについてはハンズオンでプログラムの実施を支援した。そして3点目は、地方における文化プログラムの実施を側面から支援するという役割である。

ACEは、2012年から2013年にかけて、フルタイムのポストで559.5人⁴²も雇用していた大組織である。このうち、ロンドン以外のイングランドを4分割し、8つの拠点に合計236人もフルタイムの職員を擁していたのである(ACE 2012b: 12)。

また、地方の文化プログラムに関して、特筆すべき点として、「クリエイティブ・プログラマー」の存在を指摘することができる。このクリエイティブ・プログラマーと名づけられた専門職員は計13名が雇用されており、ロンドンを含む英国全土・13地域に配置されていた。「ク

図表14 ACEの地方組織のポスト数(2012年/2013年)

地域区分	地方組織	ポスト
North	Newcastle Dewsbury Manchester	58人
Midlands	Nottingham Birmingham	58人
South East	Cambridge Brighton	29人
South West	Bristol	91人
合 計		236人

資料：ACE 2012b をもとに筆者作成

リエイティブ・プログラマー」は最初にLOCOGに所属していたが、その後、ACEに所属が移管された。この「クリエイティブ・プログラマー」の役割は3つあった。ひとつはロンドンだけでなく、英国全土の国民の関心を喚起することであった。そのため、「文化プログラム」とはどのようなものなのか、についての広報活動等を展開した。2つ目の役割は、地域で活動するアーティストや文化団体に全国レベルでの活躍の機会を提供し、結果としてLOCOGが委嘱した文化プログラムが英国全土にバランス良く展開するようにすることであった。そのため、各地域で活動するアーティストや文化団体等に対して、インタビュー調査を実施し、それら文化セクターとの関係を構築していった⁴³。

そして3点目は前述したInspireプログラムの実質的な認定者としての役割である。Inspireプログラムの認定について、当初はLOCOGが委員会を設置して、ひとつひとつのプログラムを評価のうえ、IOCに推薦していた。IOCはInspireプログラムの承認にリスクがあると考えていたようであるが、IOCとLOCOGとの信頼関係は時間の経過とともに良好に転じていった。こうしたやり取りを通じて、LOCOGがIOCから信頼を勝ち取り、その結果としてLOCOGがIOCに諮ることなくInspireプログラムを決定してもよいということが既成事実化した。その後、LOCOGは、特に地方のInspireプログラムに関して、クリエイティブ・プログラマーたちにプログラムの選定を委託することとなった⁴⁴。

すなわち、Inspireプログラムをはじめとして、ロンドン大会の文化プログラムが、英国全土で実施することができた背景として、このクリエイティブ・プログラマーの存在を指摘することができるのである。

■Legacy Trust UK

Legacy Trust UKは、2012年のロンドン大会においてスポーツや文化のレガシーを創出し、これを残していくことを目的とした時限設置型の非営利組織で、2007年に設立された。

文化プログラムに関して、Legacy Trust UKは主に2つの役割を担った。ひとつはACEと同様に資金提供者としての役割であり、全事業費のうち約28%を拠出した。その原資として、National Lottery (Big Lottery Fund) から4,000万£が提供された。たとえば前述したナショナル・プロジェクトのうち、Somewhere to _は、レガシー・トラストからの資金で実施された。

2点目は、文化プログラムの支援者としての役割である。どちらかと言えば、芸術性が高い文化プログラムはアーツカウンシルが支援しており、Legacy Trust UKは「草の根」的な文化プログラムを支援した模様である。なお、Legacy Trust UKの文化プログラムに関する体制は5名であった⁴⁵。

■GLA (Greater London Authority ; 大ロンドン庁)

GLAは五輪大会のホストシティとして、文化プログラムを通じて都市の創造性を発揮することを企図していた。

文化プログラムに関するGLAの主な役割は2つあった。ひとつは資金提供者としての役割であるが、他の資金提供主体と比較すると割合は低く、全事業費の3.6%を負担したにすぎない。この資金に関しては、GLAが独自にファンドレーシングを行った。もうひとつの役割は文化プログラムの実施主体としての役割であり、特にロンドン2012フェスティバルにおいては中核的な役割を果たした。こうした文化プログラムを実施するため、最盛時には約40名の規模のチームが組成された。このうち2名は、GLAおよびLOCOGという2つの組織を50/50

で勤務するという兼務の形態であり、この2名の存在を中心としてGLAとLOCOGとの円滑な意思疎通が図られていた⁴⁶。

■DCMS : The Department for Culture, Media & Sport

DCMSは、文化プログラムに関する全体的なコーディネーターの役割を担った。特に、2010年から2011年にかけての時期、LOCOGとカルチュラル・オリンピック委員会が別の主体であったので、DCMSが両者の調整を行っていた。

一方で、DCMSはLOCOGや文化プログラムに対して直接的な資金支援はしていない(ただし、アーツカウンシルを通じての間接的に資金を提供している)。

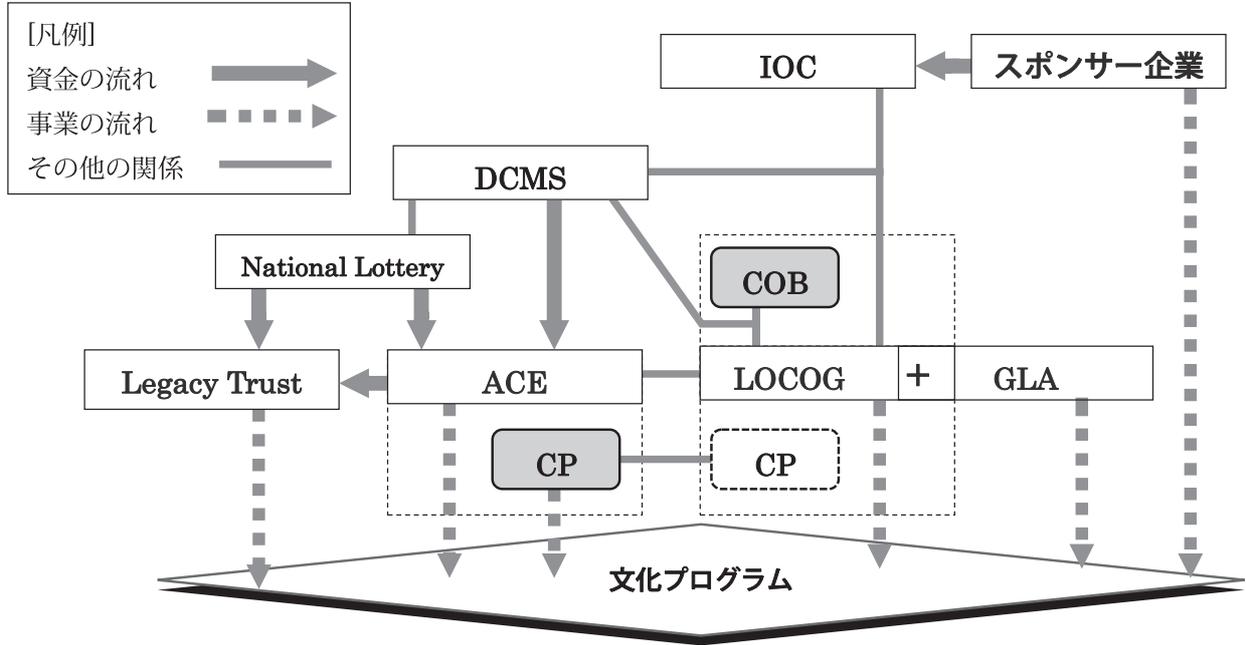
なお、DCMSにおける文化プログラムの担当者は兼務も含めて5名であった、担当者の人数少ないのは、個別のプログラム等の詳細には関与していないためである⁴⁷。

■スポンサー企業

オリンピックのスポンサー企業の中には、共同出資者として、文化プログラムに対して資金を直接提供した組織も数多くあった。たとえば、BTとBPが文化プログラムのPremier Partnerとなったほか、Panasonic、Samsung、Freshfields、BMW、Eurostar等の企業も、ブリティッシュ・カウンシルや、スコットランド、ウェールズ、ノーザン・アイルランドの各アーツカウンシル、観光振興団体等の公共セクターの組織とともに、オリンピック/パラリンピックのスポンサーとして名を連ねた。各企業は、LOCOGを経由して資金援助を行うのではなく、直接プロジェクトをサポートすることもあった。支援を受ける文化組織は多くの場合、地方自治体、公共の資金援助団体、慈善団体、個人の資金提供者をはじめとして、オリンピック/パラリンピックの公式スポンサーではないところからも資金を確保することができた(Garcia2013 : 137)。

上述したさまざまなステークホルダーの関係を概念図として整理したものが、図表15である。

図表15 文化プログラムにおけるステークホルダーの関係概念図



注 CP：クリエイティブ・プログラマー、COB：カルチュラル・オリンピアド委員会
 資料：筆者作成

5 | 事例研究：地方都市における文化プログラム「リーズ・キャンヴァス」

① 『Artists taking the lead：アーティストがリーダーシップをとる』

前述した通り、ロンドン大会の文化プログラムは、五輪大会の開催都市であるロンドンだけでなく、英国全土で実施された。その象徴的なプロジェクトが、『Artists taking the lead：アーティストがリーダーシップをとる』である。この『Artists taking the lead』の実施対象地域は、オリンピック開催都市のロンドンだけではなく、英国の全地域を12地域に区分して、各地域でプロジェクトが実施された。

同プロジェクトは、英国の全地域からオンラインを通じて公募され、12の地域に分けて専門家によって選考された、アーティスト発案型のアート・プロジェクトである。同プロジェクトは、2009年春に公募が開始され、同年8月に各地域で一次審査が行われて、計59プロジェクトが選考通過した。また同年10月に各地域で二次審査が行われ、計12プロジェクトを決定している。最終的

な合格率は、約0.6%と、極めて競争率の高い審査であった。

②事例研究：『Leeds Canvas』

この『Artists taking the lead』のひとつとして、ヨークシャー地域で選定されたプロジェクトが『Leeds Canvas』である。同地域においては133件のプロジェクトがエントリーしたが、一次選考で5つのプロジェクトに絞られ、その中から、『Leeds Canvas』が選定されている。

実は、この『Leeds Canvas』は、2012年ロンドン・オリンピックを幕開けとして、以降は4年ごとにさまざまな芸術監督を招へいして、ヨークシャー地域に持続的な文化遺産を提供することを目的とした、一連のプロジェクトの総称である。このような性質のプロジェクトであるため、『Leeds Canvas』は、ヨークシャー地域を代表するさまざまな文化組織とのパートナーシップによるプロジェクトとなっている。

そして、2012年の『Leeds Canvas』は、映像作家のブラザーズ・クエイ (Brothes Quay；クエイ兄弟) が、

図表16 Artists taking the leadの12プロジェクトの概要

地域	プロジェクト名	アーティスト名	概要
East	On Landguard Point	Robert Pacitti	サフォーク地方で成長したアーティスト、Robert Pacitti は、同地域における『家庭』という観念を調査するために、一連の大規模な、公的なアウトドアイベントを開発し、それを元に長編映画を2012年に制作。
East Midlands	Lionheart Project	Shauna Richardson	ライオンハート・プロジェクトは、オーダーメイドで、モバイルを活用して、ガラスケースの中に3頭の巨大な手編みのライオンを製作した。これらのパワフルでリアルな作品は、イングランド東中部地方で生産されたスウェイルデイル種の羊毛を使うことによって、象徴性および素材の両面から、イングランド王であったリチャード1世（獅子心王）の3頭のライオンのふさを再現している。また、それは同地域の豊かな織物文化の遺産を賛美することにもなる。
London	Bus-Tops	Alfie Dennen and Paula Le Dieu	バストップとは、ロンドンを横断するバスの待合所の屋根にLEDのパネルを設置してデジタルのキャンバスとしたパブリックアート。様々な定評のあるアーティストたちへの委託作品のショーケースとなった。また、それだけではなく、ロンドンっ子たちがゲームで遊びながら、創造性を表現することも可能にした。
North East	Flow	Owl Project and Ed Carter	「フロー」は潮流によって作動する機械である。タイン川の潮流によって作動する水車を使って自家発電する「水の上に浮かぶ建物」である。この「水の上に浮かぶ建物」は、常に変わる川の環境に反応して音とデータを生成する音響機械と楽器を収容している。
North West	Column	Anthony McCall	Anthony McCallの「カラム」は、ほっそりとして、曲りくねって、回転している雲の「カラム(柱)」を形づくり、それがイングランド・マージーサイドの大都市ウィラルのイースト・フロートの水面から空に立ち昇ることを意図した。ただし、技術的な要因のため、プロジェクトは中止された。
South East	The Boat Project	Lone Twin	アーティストはサウスイーストの住民に、たとえば、鉛筆、食卓、庭の小屋など、個人的に意味のある木製品を寄贈してほしいと依頼した。それらを実際に海で使用する船の建造に組み入れた。
South West	Nowhereisland	Alex Hartley	2012年の夏に、北極の島で組み立てられた大規模な彫刻 Nowhereislandは、『島国家』としてイングランド南西部を訪れ、周辺の港や波止場に停泊しながら漂う。
West Midlands	Imagineer Productions	Godiva Awakes	このプロジェクトは、ウエストミッドランド地方のアイコンであるレイディ・ゴディヴァを、高さ10メートルもあるカーニバルの操り人形の見せ物として生き返らせた。
Yorkshire	Leeds Canvas	the Brothers Quay	リーズの市民、街、アーケード、そして街を流れている水路等は、ブラザーズ・クエイにより演出されたリーズ・キャンバス・プロジェクトの素材となった。本プロジェクトには、リーズのアーティストと文化団体も深く関与した。
Northern Ireland	Nest	Brian Irvine and John, (Dumbworld)	ネストは、ちょっとしたものを寄贈するという簡単な行為を通じて、巨大な規模のアートを製作するために、北アイルランドの人々を招いた。
Scotland	Forest Pitch	Craig Coulthard	Craig CoulthardのForest Pitchは、森林の中に隠されたフルサイズのフットボール競技場から構成されていた。競技場のスペースを作るために切り倒された商業用の材木は、ゴールポスト、シェルター、およびこのサイトの他のインフラを作成するために使用された。
Wales	Adain Avion	Marc Rees	Adain Avion は、飛行機DC-9の残骸から作成された移動可能なアートスペースである。スペインの彫刻家でありデザイナーでもあるエドアルド・カハルにより発見され、変形された。

資料：Arts Council England 資料⁴⁸をもとに筆者作成

図表17 『Leeds Canvas』のパートナー組織

Opera North
 Northern Ballet Theatre
 West Yorkshire Playhouse
 Phoenix Dance Theatre
 Yorkshire Dance
 Leeds Met Gallery and Studio Theatre
 Situation Leeds
 Leeds City Council
 Leeds Art Gallery

資料：Leeds Canvas 資料⁴⁹をもとに筆者作成

リーズという都市を「空白のキャンパス」と見立て、街全体をアート化するプロジェクトとして企画された。具体的には、リーズ市の水路、リーズ駅の地下、ウォーターフロント（運河沿い）、等の場所をテーマに、予想外の出会いを演出した。

ブラザーズ・クエイは、陰鬱、幻想的で、完成度の高い、独特の映像世界を生みだしており、世界中でカルト的な人気を誇っている映像作家である。ブラザーズ・クエイの代表作としては、ポーランドの作家ブルーノ・シュルツの短編『大鱈通り (Ulica Krokodyli)』(1933年)を原作とする「ストリート・オブ・クロコダイル (Street of Crocodiles)」(1986年)があげられる。

この『リーズ・キャンヴァス』プロジェクトは、2012年5月18日から20日の3日間にわたり開催された。オリンピック自体は7月からの開催であるが、英国ではすでにオリンピック・フィーバーは始まっており、また、オリンピックと同時期に開催する必要は必ずしもないため、5月に開催することに決定された。

リーズ・キャンヴァスの参加者は、リーズの街を歩いて、このプロジェクトを体験することになる。たとえば、1,000万個のレンガで構築されている、ヴィクトリア王朝時代の神秘的な地下水路においては、英国の作曲家ギャヴィン・ブライアーズ (Gavin Bryars) の“Blake Morrison” (ヨークの詩人の名前) という曲、カール・オルフ (Carl Orff) が作曲した子どものコーラス、川の音をサンプリングした音楽等が聞こえてくるほか、音楽にあ

わせて、照明デザインも効果的に導入された。

また、このアーケードの支線部分は現在、駐車場として利用されているが、ここでブラザーズ・クエイが演出する幻想的な博物館のような展示が設置された。

このリーズ・キャンヴァスに対して、ブラザーズ・クエイが最初に提案したコンセプトは“Flow of River / Flow of People”であった。リーズ市はその周囲を川と運河が巡っている都市であり、その水辺に人々をどのように近づけるのか、をコンセプトにしていた。その後、コンセプトは、“Over World & Under World”と最終的に決定された。すなわち、「見えるもの」と「見えないもの」が錯綜・混濁して、新しいヴィジョンをかたちづくるイメージである。

ブラザーズ・クエイは、アメリカの作曲家チャールズ・アイヴズ (Charles Ives ; 1874年～1954年) の管弦楽曲「宵闇のセントラル・パーク : Central Park After Dark」(1898年～1907年) に高い関心を持っており、同曲のハーモニーからカオスに至るコントラストを、リーズ・キャンヴァスのコンセプトの象徴と位置づけた。

なお、リーズ・キャンヴァスは、文化に関心の高い特定の観客層だけではなく、一般の人も革新的なアートに興味があるという認識のもと、アートのエクセレンス (卓越性) を街中で展開することにより、一般の人々の生活に近づけようという壮大なチャレンジでもあった。こうしたことから、リーズ・キャンバスは、できるかぎり多くの人々 (市民、観光客等) にこのプロジェクトを体験してもらうことを第一の目標としていた。

ちなみにリーズ・キャンヴァスの事業費は、ACEから助成される50万£のみである。その他機関からの助成金等はない。地元自治体であるリーズ市やヨークシャー州は、公共空間の提供等、非資金的援助のみである。

このようにして実施されたリーズ・キャンヴァスは、2012年5月18日から20日までの3日間で約2万人の聴衆を集めた。参加者を対象としたアンケート調査で、回答者の56%が「文化イベントを体験するという明確な意図」をもってリーズを訪問していた。

図表18 リーズ・キャンヴァス：中心市街地でのアート・プロジェクト



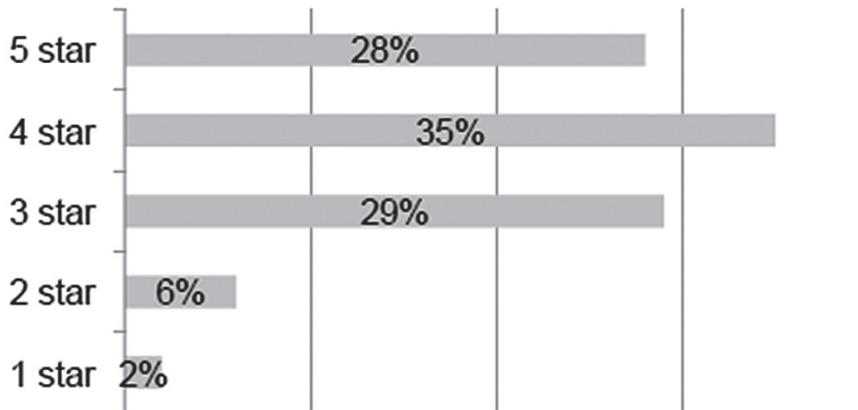
出所：筆者撮影（2012年5月）

図表19 リーズ・キャンヴァス：中心市街地でのパフォーマンス



出所：筆者撮影（2012年5月）

図表20 Lees Canvasの参加者による評価（5段階）



資料：Walter Hardley Ltd. (2012)

そして、リーズ・キャンヴァスの参加者による5段階評価によると、平均で「4つ星」という高い評価を受けている。また、リーズ・キャンヴァスをひとつの単語で表現すると、図表21のインフォグラフィックスの通り、「good良い」「interesting興味深い」「different異質な」「weird奇妙な」等があげられており、全体として肯定的な評価であった。

また、リーズ・キャンヴァスの事業パートナーとなったリーズに本拠を置く8つの文化団体においては、キーパーソン同士の交流がより深まり、「ひとつの文化ユニット」としてより良く機能する関係となった、とのことであ

る。

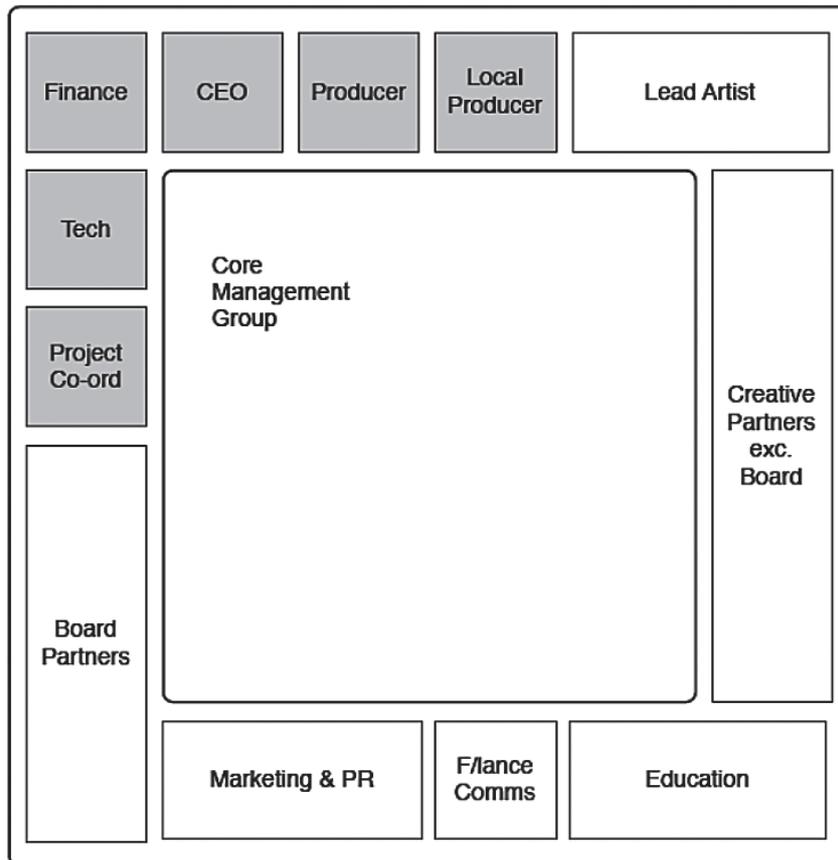
一方で、リーズ・キャンヴァスは、アーティストが主導してプロジェクトを進めることを優先するということを前提とした事業であったため、本来であればアーティストが責任をもって判断を下すことができないような事項（たとえば、予算と時間の管理、スタッフの健康や安全性の管理、都市や地域への貢献、等）もアーティストの判断に委ねられてしまった点が課題として指摘されている。こうした課題を踏まえ、報告書では望ましいマネジメント・モデルの組織イメージが提案されている。

図表21 Lees Canvasの参加者による評価（コメント）



資料：Walter Hardley Ltd. (2012)

図表22 望ましいマネジメント・モデルの組織イメージ



資料：Walter Hardley Ltd. (2012)

③その他の地域の事例：リバプール

上述した通り、成功事例と評価できるリーズのような事例がある一方で、地域での文化プログラムの展開がうまく進まなかった都市もある。

たとえば、North West地方の中心都市であるリバプール市においては、特徴的な文化プログラムは展開されなかった。同市では、文化プログラムの実施期間とも重なる2008年に欧州文化首都を開催した。また、2008年、2010年、2012年には、英国で最大の国際芸術展であるリバプール・ビエンナーレを開催している。さらに、2012年には、リバプール港を出港した後に沈没したタイタニック号の（沈没から）100周年であったので、関連するさまざまなイベントが多数実施された。しかし、これらの文化事業はすべてオリンピックの文化プログラムとは直接関係なく実施されたのである。

リバプール市の文化政策担当者へのヒアリングによると、「五輪大会の文化プログラムはリバプールにとってそれほど重要ではなかったし、あまり盛り上がりもしなかった。五輪大会のフォーカスは、地方都市ではなくロンドンであった。そして、リバプールで開催した欧州文化首都やリバプール・ビエンナーレに活用できる資金は基本的に提供されなかった。英国政府は欧州文化首都やリバプール・ビエンナーレを文化プログラムの一部にしたいと考えていたようであるが、資金的な面から実現しなかった。また、そもそも地方都市に対する文化プログラムの資金配分は少なかった。さらに、文化プログラムのうち、Artists taking the leadの委嘱作品（Column）は結局のところ、作品としては完成せずに失敗した⁵⁰というコメントがあげられている。

6 | 文化プログラムの「レガシー」と課題

①文化プログラムの「レガシー」

前項までロンドン大会の文化プログラムを概観してきた。ここであらためて整理すると、ロンドン大会の文化プログラムは大きく3点の特徴があったと考えられる。1点目は、従来の五輪大会はあくまでもスポーツが中心

であったのに対して、ロンドン大会では、もうひとつの中核として「文化」という概念を明確に提示したことである。2点目は、スポーツ競技についてはロンドンにほぼ集中していたものの、文化プログラムに関しては英国全土で開催されたという点である。そして3点目は、文化プログラムの件数や事業費、参加者数等、規模（量）の面から見ても、文化プログラムの多様性や内容等に代表される質の面から見ても、ともに過去の五輪大会には見られない、圧倒的な水準であったという点である。

では、このような文化プログラムの「アウトプット」に対して、「レガシー」としてはどのような成果があったのであろうか。以下において、国民全般、文化関係者、地域という3つの視点から、「レガシー」について検討してみたい。

②国民全般に対するレガシー

最初に「国民全般に対するレガシー」についてであるが、文化プログラム来場者の70%以上は、オリンピック／パラリンピックとの関連でロンドン2012フェスティバルに立ち会えたことは「『一生に一度』の体験である」と回答している。なお、The Independent誌は「一生に一度ではない、それよりはるかに素晴らしい」（2012年8月7日）と報道している（ACE and LOCOG2013：3）。

また、フェスティバル参加者の84%は、「フェスティバルは、オリンピック／パラリンピックにプラスの影響を与えた」と回答している（ACE and LOCOG 2013：31）。

そして、文化プログラムを体験した国民は、今後の文化活動に対する意向にプラスの影響を与えている。たとえば、ロンドン2012フェスティバルのイベント時に実施された調査によると、回答者のうち58%は文化プログラムを経験したことによって「他の文化イベントにも足を運んでみようという気持ちになった」と回答している。また、2012年9月の国勢調査では、35%の国民がオリンピック／パラリンピックをきっかけに今後文化活動に「参加する人々の数は増えるだろう」と回答している

図表23 ACE年次報告書の表紙となったスー・オースティン “Flying Free”



資料：ACE (2013b)

(Garcia 2013 : 66)。

このようなレガシーが発現した背景として、ロンドン大会の文化プログラムにおいては、国民を単なる観客として位置づけるのではなく、たとえばBig Danceのように国民自らが主体的に参加することができるような仕掛けがなされていた点を指摘することができる。

さらに、身体障害者およびその芸術表現に対する国民の考え方にも変化が見られた⁵¹。実際、スー・オースティンによるUnlimitedのプログラム“Flying Free”においては、車椅子は行動の制約ではなく、むしろ限界のない(unlimited)自由の象徴のような印象を与える。そして、Unlimitedは現在も継続的に実施されており、また、リオ・デ・ジャネイロ大会にも文化プログラムとして継承される見込みである。

③文化関係者に対するレガシー

次に、「文化関係者に対するレガシー」として、文化関係者をめぐる新たなネットワークが新たに構築された、という点をあげることができる。データをみると、文化プログラムの実施を通じて、文化機関、企業、教育機関、地方自治体、スポーツ組織等の間で合計10,940もの新たなパートナーシップが誕生した、とのことである(Garcia 2013 : 17)。たとえば、ACEとBBC等、従来は関係が薄かった大規模な組織の間でも、文化を巡る新しいパートナーシップが確立された。リーズ・キャンヴァスの事例で先述した通り、地方都市における文化プログラムにおいても、新たなネットワークの構築がなされている。

そして、こうした文化関係者のネットワークの副産物として、「カルチャー・ダイアリー」⁵²というサービスがGLAによってオリンピック後に実装された。この「カルチャー・ダイアリー」とは、文化産業の関係者等が、それぞれが主催する文化イベントが同じ日に重複しないように調整するためのスケジューラーで、無料で利用することができる⁵³。

その他、文化関係者に関するレガシーとして、文化活動に関するR&D(研究開発)の必要性が明確化された、という点を指摘することができる。一連の文化プログラムは個々の文化団体やアーティストにとっても革新的なチャレンジであった。そして、革新的であるが故に、一部のプロジェクトは事業として失敗したことも事実である。たとえば、前述したとおりArtists taking the leadのうち、North West地方で実施する予定であったColumnというプロジェクトは、技術的な要因で中止となってしまった。

今後は、1件あたりの予算は少なくともよいが、アーティストのアイデアが実現可能かどうかについてのR&Dが必要であり、そうしたR&Dの結果をもとに、プロジェクトの予算を拠出するかどうかを判断するという仕組みが必要である、と関係者からも指摘されている。たとえば、Unlimitedでは2012年以降、R&Dを重視しており、R&Dの公募プログラムを導入している。2014

年現在で約200件の応募があり、その中から17件を選定して実施している、とのことである⁵⁴。

一方で、ソーシャル・イノベーションに関する先端的な助成機関であるNESTA (National Endowment for Science, Technology and the Arts ; 英国国立科学・技術・芸術基金) はオリンピック文化プログラムを「一過性の事業である」と判断したため、文化プログラムには基本的に関与しなかった⁵⁵。その意味では、文化芸術を通じて新しい社会や経済を創造するという本質的なチャレンジについては、2012年のロンドン大会においては実は行われなかったと評価することもできる。

④地域に対するレガシー

最後に、「地域に対するレガシー」としては、五輪大会の開催地区であり、大会後にオリンピック公園が整備されたロンドンのイースト地区の事例をあげることができ

る。同地区は、従来は低所得者層が暮らす、文化面でも立ち遅れた地区とみなされていたが、ロンドン大会後に競技会場がアートパークとして整備され、若い世代にも人気の地区に変貌している。また、同地区でロンドン大会開催後の2013年にHOXTON MINIPRESSという小規模の出版社が起業しており、同社では、地元のイラストレーターや写真家による、地元の人物たちを表現した書籍を出版している。そのうち“50 PEOPLE OF EAST LONDON”においては、地元在住のイラストレーター、アダム・ダント (Adam Dant) が、タイトル通りに、イースト・ロンドンで見かける典型的な50人をユーモラスに描いている。同書はオリンピック公園のミュージアム・ショップ等でも販売されており、これも文化プログラムのひとつのレガシーと評価できるのではないかと。

7 | 提言：「地域版アーツカウンシル」の設立を

①文化プログラムが地方で展開された背景

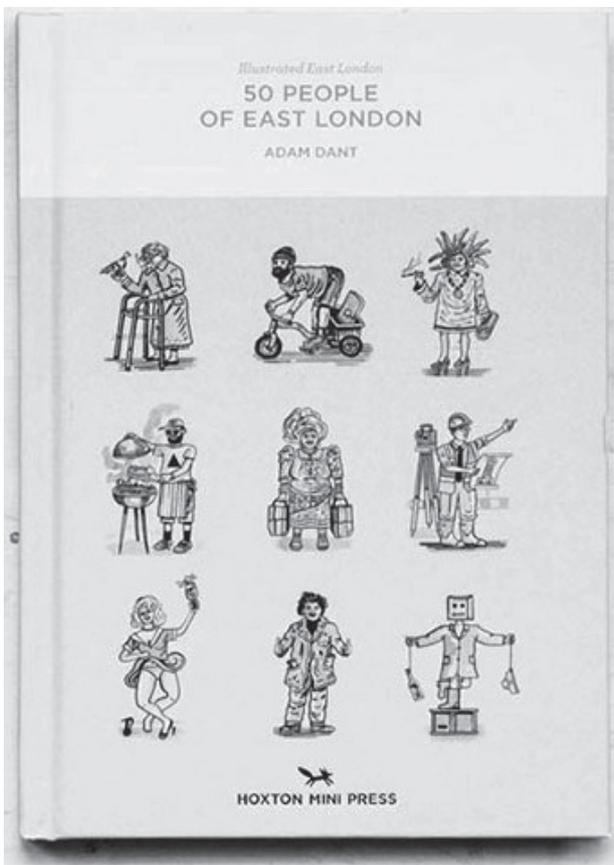
先述した通り、ロンドン大会の文化プログラムは、五輪大会の開催都市であるロンドンだけではなく、イギリス全土を対象として展開されたが、その背景としては、以下の3つの事項をあげることができる。

ひとつは、イギリス全土でオリンピックのムーブメントを盛り上げていくための戦略的なコミュニケーション・ツールとして「文化プログラム」が位置づけられた、という点である。そして、オリンピックの閉幕後には、ロンドンをハブとする文化面での全国的なネットワークがオリンピックのレガシーとして残ることが期待された。

2点目は、文化多様性の観点から、首都ロンドンだけがイギリスの文化を代表するわけではない、という考え方である。ロンドンがオリンピック開催の立候補都市として招致活動を展開し始めた時期(2002年頃)においては、「クール・ブリタニア」というキャッチ・フレーズがすでに使用されなくなっていたことも、ロンドンのみがイギリスの文化を表象するわけではない、という考え方の一因になったものと推測される⁵⁶。

3点目は、創造都市政策の一環として位置づけられる、

図表24 50 PEOPLE OF EAST LONDONの表紙



資料：筆者撮影

社会的包摂の観点である。2005年7月6日にロンドン・オリンピックの開催が決定したが、その翌日(7/7)に、五輪大会の開催地となるロンドンにおいて地下鉄の3カ所がほぼ同時に、その約1時間後にバスが爆破され、計56人が死亡するテロ事件が発生した。このようなテロ事件が発生した背景には、政治的、民族的、宗教的等、さまざまな要因があると考えられるが、テロ実行犯およびその予備軍となる地方都市の若者層が経済的な要因等から未来に希望を持っていないことも大きな要因のひとつであると考えられる。そして、こうした地方都市の若者たちの、不安、あせり、悲しみ、怒りを和らげる社会的包摂のプログラムとして、オリンピック「文化プログラム」が期待されていたのである。

② 「地域版アーツカウンシル」の提言

次に、ロンドン五輪大会において、このように大規模な文化プログラムが現実にも実施できた背景としては、2つの組織体制に関する特徴を指摘することができる、

ひとつは、英国に「アーツカウンシル(ACE)」という、文化芸術支援のための専門組織が存在していたことである。実際、文化プログラムの芸術監督であったルース・マッケンジーがそのポストに着任したのは、すでに文化プログラムの一部が開始された2010年であった。このような遅い着任でも、結果として文化プログラムを成功裏に導けた背景に、ACEの存在を指摘することができる。前述した通り、ACEは英国全土に8つの地方出先機関を持ち、ロンドン以外に236人の職員を配置していた。さらに、文化プログラムの責任者として、国内各地に13人のクリエイティブ・プログラマーを派遣していた。

また、英国全土で活動数として合計18万件弱もの文化プログラムが実施できた、もうひとつの理由として、「Inspireプログラム」の存在をあげることができる。前述した通り、「Inspireプログラム」は、草の根レベルの文化プログラムが中心であり、文化プログラムの全国的な展開に大きく寄与したと推測される。そして、これらのInspireプログラムを実質的に認定していたのが、上記のクリエイティブ・プログラマーであった。

英国の文化プログラムを事例として紹介・研究するにあたっては、個々の事業内容が興味深かったかどうかといった点だけではなく、ロンドン大会の文化プログラムが英国全土で、かつ草の根レベルの事業も一体となって開催されたということを実現した構造こそ、参考にすべきであると考えられる。換言すれば、現時点において優先度の高い論点とは、文化プログラムの内容“What”ではなく、それを実現する仕組み“How”なのである。

一方、本論で分析している文化プログラムを日本全国で実施していくためには、英国と同様、アーツカウンシル的な組織が必要になると考えられる。ただし、文化庁が本格稼働させようとしている中央政府のアーツカウンシル(「日本版アーツカウンシル」)だけではなく、全国で「地域版アーツカウンシル」を立ち上げていくことが必要であると筆者は考えている。そのような「地域版アーツカウンシル」の設立と育成を文化庁が側面から支援していくことが必要であろう。このように、中央と地方のアーツカウンシルが両輪で存在することが肝要であるが、その際に、中央政府のアーツカウンシルと「地域版アーツカウンシル」はあくまでも平等・並列の関係であるべき点に留意が必要である。

なお、本年4月16日に答申された「文化芸術の振興に関する基本的な方針(第4次基本方針)」においては、「日本版アーツカウンシルの本格的な導入を図る」と記述されているが、「地域版アーツカウンシル」に関しては、直接的な記述は存在しない。同基本方針には、「地方公共団体等が文化芸術団体、企業、NPO等の民間団体や大学等と一体となって企画・実施する計画的な文化芸術活動を推進する」と書かれているのみであり、「地域版アーツカウンシル」を実現し、それを中核とした文化政策と文化プログラムを実施していくためには、残念ながらまだ表現が弱い。

一方で、文化庁は、創造都市ネットワーク日本に加盟している都市の数について、全自治体の10%に相当する170都市という意欲的な目標を掲げている。もっとも、この創造都市ネットワークが普及していくとともに、自治

体の間からは「いったい何をすれば創造都市と呼ばれるのか?」といった根本的な疑問も出されるようになっていく。こうした状況を踏まえ、日本における創造都市政策の中核に、「地域版アーツカウンシル」の設置を据えてはどうかと筆者は考えている。

なお、この「地域版アーツカウンシル」の具体的な設立のイメージは、地域によって異なると考えている。たとえば、行政が設置した文化財団が中核となって設立されるケースもあるであろうし、それ以外に、地域で活動するアートNPOや観光振興機関等、さまざまな主体が参画して、新しい政策提言およびプログラム実施の中核となることが想定される。

この点に関して、地方自治体の文化担当の職員を対象として、アートマネジメントの研修の機会等を提供すれば、地域における五輪文化プログラムも対応できるのではないかという意見があるかもしれない。しかし、文化庁自体も同様であるが、ほとんどの地方自治体においては文化政策の専門職の制度が存在しないため、職員の研修を行っても、数年後には異動してしまうこととなり、地域の文化振興に十分な対応ができない懸念がある。また、英国のアーツカウンシルの職員に求められているものは極めて高度な専門性であるため、その面からも一般的な自治体の職員では対応が困難であると考えられる。

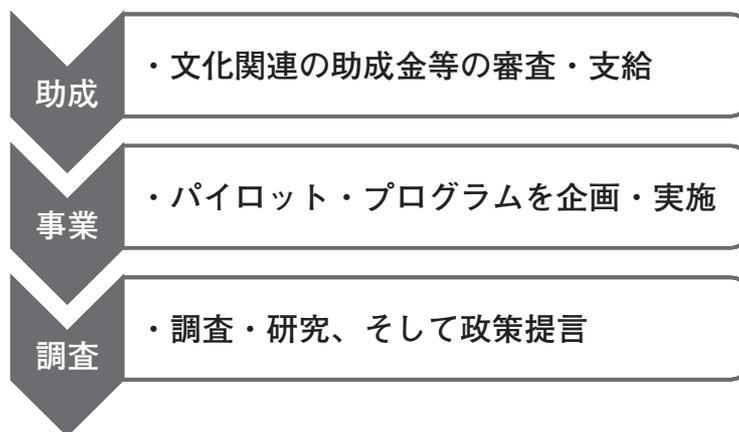
③ 「地域版アーツカウンシル」の組織イメージ

この「地域版アーツカウンシル」は、具体的には、3つの機能を有しているというイメージを想定している。ひとつは「文化関連の助成金等の審査・支給」という機能である。特に文化プログラムの展開にともなって、オリンピック組織委員会等からの補助金や委託費等を、全国の文化団体やアーティストに助成・支給していくことが必要になると想定されるが、地域においてその役割を担うのが「地域版アーツカウンシル」になると筆者は想定している。そして、「地域版アーツカウンシル」は、単に資金を提供するだけでなく、ハンズオンでの支援もあわせて実施することが必要不可欠である。

2つ目は、地域においてパイロット・プログラムを企画・実施するという機能である。地域において、新たなイノベーションを起こすような文化団体やNPO等が存在している場合には、上述したような「助成金等の審査・支給」を実施すればよいわけであるが、社会的ニーズは存在するのに、その担い手が地域に存在しないという場合には、「地域版アーツカウンシル」自身が、試行的に文化プログラムを企画・実施するという場面も必要であると考えられる。

そして3点目は、調査・研究、そして政策提言という機能である。これは民間企業におけるR&Dに相当するものと言えよう。上述したような、地域で社会的に必要な

図表25 「地域版アーツカウンシル」に求められる3つの機能



資料：筆者作成

事項を発見するためにも、調査・研究というシンクタンク機能は極めて重要である。

そして、なにより重要なポイントは、これら「地域版アーツカウンシル」は、中央政府から設置を義務づけるのではなく、あくまでも各地域の発意に基づいて、ボトムアップ型で五月雨式に設置されていく、という点である。中央政府（文化庁等）は、その設立を側面から支援することとなる。こうした試みが一定の成果を達成することができれば、日本はオリンピックのレガシーとして、「地域版アーツカウンシル」を世界に対して、ベスト・プラクティスとして提示することができるのではないか。

ただし、全国で「アーツカウンシル」を新たに創設することになった場合、それらの組織を構成する人材をどのように確保・育成するのが大きな課題となる。そこで、文化プログラムに関する初動が他の道府県より早く展開すると推測され、かつより多くの文化プログラムが実施されることとなる東京が、地域版アーツカウンシルの人材育成センター的な機能を担うことが望ましいと筆者は考えている。

なお、文化プログラムを実施するために「地域版アーツカウンシル」を創設しても、文化プログラム自体は2020年の夏に終了してしまう。したがって2021年以降は、文化プログラム以外の原資を確保していくことが必要である。そこで、2016年からの文化プログラムのための補助金等を「地域版アーツカウンシル」に提供するにあたっては、当該プログラムの審査をするのは当然のこととして、「2021年以降の組織の持続可能な戦略（出口戦略）」についても企画・提案してもらい、これをあわせて審査することが必要である。そして、地域において持続的な活動をしていくためには、文化芸術を中核としつつも、たとえば観光政策、福祉政策、教育政策、産業政策等と連動して、地域の課題を解決していくことが必要となるであろう。すなわち、この「地域版アーツカウンシル」は、2021以降において、より自立した組織として地域の課題解決を担っていく主体となるべきなのである。

8 | おわりに：2020東京オリンピックで日本はどう変わるか

①1964年のレガシー

さて、本稿においては、2012年のロンドン大会の文化プログラムを中心に述べてきたが、冒頭で触れた通り、2020年には東京で2度目の五輪大会が開催される。

かつて1964年に東京で開催された東京オリンピックにおいては、その開催にむけて、競技用施設だけでなく、東海道新幹線や東京モノレール、首都高速道路等のインフラストラクチャーが整備されたほか、観戦客を受け入れるための数々のシティホテルも開業し、良くも悪くも東京の風景は一変した。そして、こうした明確な変化は、日本が第二次世界大戦敗戦の荒廃から復興し、先進国として国際社会に復帰するというメッセージとなって国内外に強く発信された。

一方、文化勲章も受賞した歴史小説家の杉本^{そのこ}苑子は、1964年の東京オリンピックの開会式に参列して、次のような感想を新聞に寄稿している。「二十年前のやはり十月、同じ競技場に私はいた。女子学生のひとりであった。出征してゆく兵士たちを秋雨のグラウンドに立って見送ったのである。（中略）同じ若人の祭典、同じ君が代、同じ日の丸でいながら、何という意味の違いであろうか。（中略）きょうのオリンピックはあの日につながり、あの日もきょうにつながっている」（杉本1964：37-39）

また、後にノーベル文学賞を受賞することになる大江健三郎は、まだ20歳代であった当時、1964年東京大会の聖火の最終ランナーが「原爆投下の日、広島で生まれた青年」（大江1964：55）であることや、自衛隊による「空にえがかれるジェット機の五輪」（ibid）について書き残している。

そして、国立代々木競技場とオリンピック選手村は、米軍のワシントンハイツの跡地であり、その前の用途は代々木練兵場であった。このような「お膳立て」を眺めると、1964年の東京オリンピックは、第二次世界大戦の記憶を日本人の心から、そして東京という街から払拭するという意図がどこかに込められていたのではないかと

と推測してみたくなる。

さらに言えば、1964年の東京オリンピックを契機として整備された首都高速道路は、ロシアの映画監督アンドレイ・タルコフスキーによって、その代表作のひとつである映画「惑星ソラリス」の冒頭で未来の都市の場면을描写するために使用された。言い換えると、1964年のオリンピックによって整備された東京に、アーティストは“過去”ではなく、“未来”を透視したのである。逆説的に言えば、それは単純に未来を信奉できる時代であったとも言えよう。

一方で、1964年の東京オリンピックにおいては、「デザイナー」という新しい職業にさまざまな活躍の機会が提供された。有名な東京オリンピックのポスターをデザインしたのはデザイナーの亀倉雄策であるが、同氏がデザイナーとして働き始めたころは「グラフィックデザイナーなどという職名は一般的ではない」（野地2013：46）時代であった。その後も「フリーランスのグラフィックデザイナーという仕事は世の中にあることなど、ふつうの人々は一向に理解してくれなかった」（野地2013：86）時代が続いたのである。そのような状況であったのに対して、「オリンピックのポスターが駅や市役所に張り出されてから、グラフィックデザイナーたちは『あれです。あれが僕らの仕事です』と胸を張って言えるようになった」（野地2013：91）のである。

また、「ピクトグラム⁵⁷が標準化されたのは東京オリンピックが世界初であり、開発したのは日本のグラフィックデザイナーたち」（野地2013：268）であった。

このように、グラフィックデザイナーたちにオリンピックを契機として彼らの実力を発揮する場が提供され、グラフィックデザイナーという「仕事は身近なものとなり、志望するものも増えていった」（野地2013：320）のである。この事例から理解できる通り、前回（1964年）の東京オリンピックでは、「デザイナー」という存在が社会から注目され、職業として確立する契機となったのである。

一方、米国の有力な慈善基金団体であるマッカーサ基

金が資金提供する「デジタルメディアと学習コンペ」の共同理事Cathy N. Davidsonは、New York Timesのブログ記事において「現在、小学校通学している子どもたちの65%は、おそらく今まだ存在しない仕事に就くだろう」と語っている⁵⁸。この記事は公表後、日本でもかなり話題になった。

こうしたことから、2020年のオリンピックへ向けて、文化に携わる新しい職業を創造することがけっして空想ではなく、現実的なビジョンになりえると筆者は考えている。

そのためには、アーティストやクリエイターが持つ社会的機能の可能性を最大限引き出していくことが2020年へ向けて必要となるであろう。

そして、オリンピックの文化プログラムにおいては、さまざまな社会実験を展開することを通じて、「文化に携わることがひとつの職業になり得るのだ」という大きなメッセージを発信していくことが重要であると考えられる。そのような社会実験を通じて、アーティストであることや文化に携わることを職業として持続可能なものとしていくことができるのではないか。そして、残念ながら今日喧伝されているように「アーティストでは食えない」という社会から脱却して、「文化で生きる」社会へと転換を図ることが必要であろう。

「文化プログラム」は、来年（2016年）の夏から早くも開始されることになる。最初の「文化プログラム」であり、象徴となるイベントが、オリンピック閉会式において実施されるハンドオーバー・セレモニー（Olympic Handover Ceremony）である。たとえば、2008年北京オリンピックの閉会式で、次回開催都市ロンドンを代表して、往年のブリティッシュ・ロックを代表するバンド「レッド・ツェッペリン」のギタリストであるジミー・ペイジが、英国の新たなディーバであるレオナ・ルイスと共演した。そして、セブなサッカー選手ベッカムが同じ舞台にのぼり、オリンピック参加国の子供たちに向かってボールを蹴った。さて、2016年夏のリオ・デ・ジャネイロから東京へのフラッグの受け渡しはどのよう

なものになるのであろうか。

②成熟国における2度目のオリンピックの意義

21世紀における五輪大会は、中国(2008年)、ブラジル(2016年開催予定)等に代表される、いわゆる新興国での開催が増加して行くものと推測される。しかしその一方で、先進諸国の都市において2度目(または3度目以降)の開催についても継続されていくであろう。それは、五輪大会の安定的な開催、および世界的な国家間のバランスというローテーションという観点からも必要になると考えられる。そして、成熟国・成熟都市において2度目ないしは3度目のオリンピックを開催する場合、その開催に本質的にどのような意義があるのか、という点について今後も問い直されていくこととなる。

2012年のロンドン大会において、成熟した国での複数回目の開催の意義について、そのヒントが提起されると筆者は考えている。2020年の東京はこれを継承し、さらにより明確な回答を提示することが求められてい

る。もちろん、東京で2回目の開催となるオリンピックが目指すものは、ハード面の都市整備が中心となるのではなく、本稿で述べたロンドン大会における「文化プログラム」がヒントを与えてくれたように、より文化的または社会的な意義が強調されたものとなるべきであろう。

先日(4月16日)、下村文部科学大臣に答申された「文化芸術の振興に関する基本的な方針(第4次基本方針)」においては、「我が国が目指す『文化芸術立国』の姿」として、「2020年東京大会を契機とする文化プログラムの全国展開等に伴い、国内外の多くの人々が、それらに生き生きと参画しているとともに、文化芸術に従事する者が安心して、希望を持ちながら働いている。そして、文化芸術関係の新たな雇用や、産業が現在よりも大幅に創出されている」と将来像を描いている。

オリンピックの文化プログラムが、こうした将来像の実現へ向けての一助に資することを期待したい。

【注】

¹ The International Olympic Committee ; 国際オリンピック委員会

² The Organising Committees for the Olympic Games ; オリンピック競技大会組織委員会

³ 国際交流基金 <<http://www.performingarts.jp/J/society/0703/1.html>> (参照2015-04-07)

⁴ 第二次世界大戦前の開催も含めると、アテネ(1896年、2004年)、パリ(1900年、1924年)、ストックホルム(1912年、1956年、ただし1956年はメルボルンとの共催)、ベルリン(1916年、1936年)、ロサンゼルス(1932年、1884年)の5都市も、それぞれ2度の五輪大会を開催した実績がある。

⁵ Olympic - Legacy.com <http://www.pe04.com/olympic/about/symposium_a.php> (参照2015-04-07) .

⁶ 2013年9月以降の会長(第9代)は、トーマス・バッハ。

⁷ ロンドンが逆転勝利した背景として、最終プレゼンテーションにおいて、ブレア首相(当時)がフランス語でスピーチを行ったことが功を奏したとも言われている。その意味では、2012年へ向けてのオリンピック文化プログラムは、ブレア政権の最後の文化(スポーツ)政策である、という見方もできる。

⁸ Ms.Jude Kellyとの意見交換時のメモ(2008年2月14日、東京芸術文化評議会にて実施)

⁹ GOV.UK <<https://www.gov.uk/government/news/london-2012-open-weekend-begins>> (参照2015-04-07) .

¹⁰ カレントアウェアネス(2009年5月1日) <<http://current.ndl.go.jp/node/12757>> (参照2015-04-07) .

¹¹ Arts Council England , Ms. Moira Sinclairへのインタビューより(2014年10月8日、ロンドン市内で実施)

¹² Somewhereto <<https://somewhereto.com/how-it-works/>> (参照2015-04-07) .

¹³ 英国の創造産業を支援する非営利組織

¹⁴ IndiePix Films <<http://blog.indiepixfilms.com/daily-news/winkleman-to-host-film-nation-shorts-awards/>> (参照2015-04-07) .

¹⁵ Discovering Places <<http://www.discoveringplaces.co.uk/about-us>> (参照2015-04-07) .

¹⁶ ACE <<http://www.artscouncil.org.uk/what-we-do2/our-priorities-2011-15/london-2012/artists-taking-the-lead/>> (参照2015-04-07) .

¹⁷ Unlimited, Ms. Jo Verrntへのインタビューより(2014年10月7日、ロンドン市内で実施)

¹⁸ この8つのナショナル・プロジェクトは、計画当初から「8つの主要なプロジェクト」として位置づけられて実施されたわけではなく、結果としてそのように位置づけられると Garcia (2013) によって整理されたものである。

¹⁹ BIG DANCE <<http://www.bigdance.org.uk/about-us/>> (参照2015-04-07) .

²⁰ Kings College , Ms. Francesca Hegyiへのインタビューより(2014年10月10日、ロンドン市内で実施)

²¹ 元資料は“London 2012 official pictograms”

²² 国際交流基金 <<http://performingarts.jp/J/calendar/201206/s-01019.html>> (参照2015-04-07) .

- ²³ Barbican Centre (http://www.barbican.org.uk/theatre/event-detail.asp?ID=14384) (参照 2015-04-07) .
- ²⁴ VisitBirmingham (http://visitbirmingham.com/ja/what-to-do/festivals-events/stockhausen-a-festival-of-light/) (参照 2015-04-07) .
- ²⁵ Scottish Government (http://www.scotland.org/features/year-of-creative-scotland-2012/) (参照 2015-04-07) .
- ²⁶ BBC News (2012年7月11日) (http://www.bbc.com/news/uk-england-wiltshire-18779304) (参照 2015-04-07) .
- ²⁷ Sampad (http://www.sampad.org.uk/event/mandala) (参照 2015-04-07) .
- ²⁸ The Guardian (2012年9月2日) (http://www.theguardian.com/culture/gallery/2012/sep/02/piccadilly-circus-circus-pictures) (参照 2015-04-07) .
- ²⁹ Arts Council England, Ms. Moira Sinclair へのインタビューより (2014年10月8日、ロンドン市内で実施)
- ³⁰ なお、インスパイア・プログラムの中には、LOCOGを経由せずに、独自で資金調達したプログラムも多数あったが、これらの金額は含まれていない。また、資金以外に「In Kind」と呼ばれる、非資金的な支援 (たとえば、ホテルの部屋を無償で提供する、等) も多数実施されている。
- ³¹ ロンドン大会の文化プログラムの数としては、「177,717」という数値が公式報告書において公表されており、日本でもこの数値が盛んに引用されている。ただし、この数字は「プロジェクト」の総数ではなく、プロジェクトを構成する「活動」の総数である点に留意が必要である。たとえば、Unlimitedというひとつの「プロジェクト」の中には複数の「活動」が包含されている。
- ³² 文化プログラムの活動数の合計である「177,717」という数値が掲載されているのは巻頭部分 (Introduction) の「数でみる文化プログラム」のページ一か所のみである。そして、その内訳のパーセンテージとして、「うち22%がパフォーマンス、18%がイベント/展覧会、52%が教育・研修・参加型のプログラム、7%がその他の活動だった」と記載されている。一方で、報告書の本編においては、「活動数」のデータとして、地域別および分野別の詳細データが掲載されているが、どちらのデータも合計が「117,717」となっている。さらに、この内訳の割合は、サマリーにおいて合計「177,717」とするデータの割合と何故か一致している。もちろん、「活動数」の集計方法の相違によって、2つのデータが併存するという事態はあり得ることである。しかし、この2つの数値が、6ケタのうち5ケタまでが同じで、しかもその内訳の割合までが同一ということは極めて不自然であると考えられる。このことから、実は正しい「活動」数は「117,717」であり、「1」と「7」が似ているために、サマリーに転記の際に間違いが生じたのではないかと筆者は推測している。ただし、ACEのWebサイト等において、現時点では訂正が行われていないため、本稿においては「177,717」と記載しておくこととする。
- ³³ London 2012 Festivalの事業費については、何故か報告書に記載が無い。ACE (2013a) の中の Michael Coventry のレポートの中の、しかも括弧書きされた部分に記載されているのみである。
- ³⁴ なお、本調査には、Open WeekendおよびInspireプログラムに関する調査結果概要も記載されているが、この2つのプログラムに関しては、包括的なデータがないため、調査結果については大半を省略しており、合計に関する数字については、少々控えめな数字となっているとのこと。
- ³⁵ 図表12の「ロンドン2012フェスティバルのプロジェクト」の芸術形式において、「悲劇」がなく、「喜劇」がある点についての理由は不明。
- ³⁶ London Organising Committee of the Olympic and Paralympic Games ; ロンドンオリンピック・パラリンピック組織委員会
- ³⁷ UK.GOV (http://discovery.nationalarchives.gov.uk/details/r/C13273031) (参照 2015-04-07) .
- ³⁸ Ms.Jude Kelly との意見交換より (2008年2月14日、東京芸術文化評議会にて実施)
- ³⁹ DCMS, Mr. Nick Cady へのインタビューより (2014年10月8日、ロンドン市内で実施)
- ⁴⁰ 2010年当時、Royal Opera House の最高経営責任者。
- ⁴¹ Kings College, Ms. Francesca Hegyi へのインタビューより (2014年10月10日、ロンドン市内で実施)
- ⁴² 559.5人という雇用者のうち「0.5人」の部分は、他の組織との兼務と推測される。
- ⁴³ Kings College, Ms. Francesca Hegyi へのインタビューより (2014年10月10日、ロンドン市内で実施)
- ⁴⁴ Kings College, Ms. Francesca Hegyi へのインタビューより (2014年10月10日、ロンドン市内で実施)
- ⁴⁵ Kings College, Ms. Francesca Hegyi へのインタビューより (2014年10月10日、ロンドン市内で実施)
- ⁴⁶ GLA へのインタビューより (2014年10月7日、市役所内で実施)
- ⁴⁷ DCMS, Mr. Nick Cady へのインタビューより (2014年10月8日、ロンドン市内で実施)
- ⁴⁸ Arts Council England Web サイト (http://www.artscouncil.org.uk/what-we-do/our-priorities-2011-15/london-2012/artists-taking-the-lead/) (参照 2015-04-07) .
- ⁴⁹ Leeds Canvas Web サイト (http://www.leedscanvas.com/what-is-leeds-canvas/) (参照 2015-04-07) .
- ⁵⁰ Liverpool City Council, Ms. Claire McColgan へのインタビューより (2014年10月9日、リバプール市内で実施)
- ⁵¹ Unlimited, Ms. Jo Verrnt へのインタビューより (2014年10月7日、ロンドン市内で実施)
- ⁵² The Culture Diary (http://www.theculturediary.com/static/about) (参照 2015-04-07) .
- ⁵³ GLA へのインタビューより (2014年10月7日、市役所内で実施)
- ⁵⁴ Unlimited, Ms. Jo Verrnt へのインタビューより (2014年10月7日、ロンドン市内で実施)
- ⁵⁵ NESTA, Mr. Hasan Bakhshi へのインタビューより (2014年10月7日、ロンドン市内で実施)
- ⁵⁶ 「クール・ブリタニア」に関する詳細は、太下義之「英国のクリエイティブ産業政策」を参照。
- ⁵⁷ ビクトグラム (pictogram、ビクトグラフ (pictograph) と) は、一般に「絵文字」「絵単語」等と呼ばれ、なんらかの情報や注意を示すために表示される視覚記号 (サイン) の一つである (Wikipedia より)。非常口のサイン等が有名。
- ⁵⁸ VIRGINIA HEFFERNAN [2011年8月7日] “Education Needs a Digital-Age Upgrade” The New York Times.

【参考文献】

- ・ ACE (2012) “Organization Review Final operating model and organization structure” p.1-13.
- ・ ACE (2013a) “Independent Evaluations of London 2012 Festival” p.1-34.
 〈http://www.artscouncil.org.uk/media/uploads/pdf/Independent_Evaluations_London_2012_Festival.pdf〉 (参照2015-04-07)
- ・ ACE (2013b) “Grant-in-Aid and Lottery annual report and accounts 2012/2013” p.1-14
 〈http://www.artscouncil.org.uk/media/uploads/pdf/ACE_Annual_Report_2012-13_Interactive.pdf〉 (参照2015-04-07)
- ・ ACE and LOCOG (2013) “Reflections on the Cultural Olympic and the London 2012 Festival” p.1-33.
 〈https://www.london.gov.uk/sites/default/files/Reflections_on_the_Cultural_Olympiad_and_London_2012_Festival_pdf.pdf〉 (参照2015-04-07) .
- ・ DCMS (2007) “Our Promise for 2012” p.1-6.
 〈https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/77720/DCMSLeafletAdobe5andlaterTPL.pdf〉 (参照2015-04-07)
- ・ DCMS (2008年) “Before, during and after ; making the most of the London2012 Games” p.1-80.
 〈<http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/+http://www.culture.gov.uk/images/publications/2012LegacyActionPlan.pdf>〉 (参照2015-04-07)
- ・ DCMS (2010年) “PLANS FOR THE LEGACY FROM THE 2012 OLYMPIC AND PARALYMPIC GAMES” p.1-14.
 〈https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/78105/201210_Legacy_Publication.pdf〉 (参照2015-04-07)
- ・ Garcia, Beatriz. “London 2012 Cultural Olympiad Evaluation Final Report” (2013) pp.1-194 〈http://www.artscouncil.org.uk/media/uploads/pdf/london_2012_academic_report/London_2012_Cultural_Olympiad_Evaluation_ICC.pdf〉 (参照2015-04-07)
- ・ IOC. (2013a) “Olympic Charter In FORCE AS FROM 9 SEPTEMBER 2013” . (=JOC訳 (2014) 「オリンピック憲章 2013年版・英和対訳 (2013年9月9日から有効)」 . p.1-95.) 〈<http://www.joc.or.jp/olympic/charter/>〉 (参照2015-04-07) .
- ・ IOC (2013b) “OLYMPIC LEGACY 2013” .p.1-72.
 〈http://www.olympic.org/Documents/Olympism_in_action/Legacy/2013_Booklet_Legacy.pdf〉 (参照2015-04-07) .
- ・ IOC (2014) “Olympic Games: Legacies and Impacts” . p.1-147.
 〈http://www.olympic.org/Assets/OSC%20Section/pdf/LRes_7E.pdf〉 (参照2015-04-07)
- ・ JOC (2003) 「オリンピック憲章 Olympic Charter 2003年版・日本語 (2003年7月14日から有効)」
 〈<http://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter200300j.pdf>〉 (参照2015-04-07)
- ・ LOCOG (2005) “London's plans for hosting the 2012 Olympic Games and Paralympic Games” p.1-600.
 〈<http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20070305103412/http://www.london2012.com/documents/candidate-files/theme-1-olympic-games-concept-and-legacy.pdf>〉 (参照2015-04-07)
- ・ LOCOG (2012) “Inspire Legacy Book A record of the London 2012 Inspire Program” pp.1-1422. 〈http://image.comms.london2012.com/london2012/ftp_images/Inspire/September/INS_PIRE_LEGACY_BOOK_SEP_2012.pdf〉 (参照2015-04-07)
- ・ Walter Hardley Ltd. (2012) “Canvas2012 : Overworlds and Underworlds”
- ・ 猪谷千春 (2013) 『IOC —オリンピックを動かす巨大組織—』.新潮社. p1-221.
- ・ 大江健三郎 (1964) 「七万三千人の《子供の時間》」.講談社編 (2014) 『東京オリンピック 文学者の見た世紀の祭典』.講談社. pp.45-55.
- ・ 太下義之 (2008) “創造都市バルセロナの文化政策 (特集 経済成長を考える).” 季刊政策・経営研究 1.1: pp.19-54.
 〈<http://www.murc.jp/report/quarterly/200801/19.pdf>〉 (参照2015-04-07) .
- ・ 太下義之 (2012) 「グローバル化とオリンピック文化プログラム——2012年オリンピック大会にロンドンが勝利した理由」.慶應義塾大学出版会 (2012) . pp.113-128.
- ・ ジム・バリーandヴァシル・ギルギノフ (2008) , 「オリンピックのすべて」.大修館書店. p1-399.
- ・ 杉本苑子 (1964) 「あすへの祈念」.講談社編 (2014) 『東京オリンピック 文学者の見た世紀の祭典』.講談社. pp.37-39
- ・ 関口英里 (2009) 「東京オリンピックと日本万国博覧会」.老川慶喜編『東京オリンピックの社会経済史』日本経済評論社, pp.1-37.
- ・ 電通and東京オリンピックス作成委員会 (1966) 『TOKYO OLYMPICS OFFICIAL SOUVENIR』.電通. p1-292.
- ・ 野地秩嘉 (2013) 『TOKYOオリンピック物語』.小学館. p.1-361.
- ・ 道重一郎 (2009) 「ロンドン・オリンピック」.老川慶喜編『東京オリンピックの社会経済史』日本経済評論社, pp.99-126.